

---

# 青と赤の神造世界

綾宮琴葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青と赤の神造世界

### 【Nコード】

N1560BA

### 【作者名】

綾宮琴葉

### 【あらすじ】

気が付いたら平原にいて、「魔法先生ネギま！」に転生！変更は認めない！」っていきなりじゃないかな？チートでも不老不死でも何でもOKとか言われちゃった。どうやら私1人だけじゃないみたいだし、ねえちよつとは相談してみない？ この作品は二次創作です。クロスや多作品の設定は持ち込まず、神霊的な独自解釈と一部の原作改変があります。ネギまの歴史重視で進みます。一部の方に苦手な表現が出る可能性があります。

## 第1話 神様に出会ってしまった（前書き）

処女作になります。

皆様の作品を呼んでいるうちに書きたくなくなってしまったため、投稿させていただきました。

大まかな構想はありますが、文章を起こすのは思っていたよりも随分と難しいのを実感しています。

ストック分を一気に掲載させていただきます。

長い眼で、どうぞよろしくお願いいたします。

## 第1話 神様に出会ってしまった

「と、言うわけだからお前らには転生してもらおう!」

……いきなり何を言っているのかな?

「拒否しても良いが、その場合は魂を浄化して記憶は消去。輪廻の輪に戻ってもらう」

気が付けば周りは地平線が見えるほどの平原、そこで小さな湖の前に私達は居た。先ほどから随分と横柄な態度の筋肉質の男が怒鳴るような声で説明をしている。

「というか転生と言っているあたり私達はすでに死んでいる、という事?」

「やっべえ! 転生キター! チート特典とかあるんだろ!?!」

「これってあれよね! 好きな能力もらい放題よね!?!」

「ママ〜? パパ〜? きまらないよ〜?」

「特典……、しかし状況しだいでは」

目の前の男性は『神様』らしい、……チート? それって『最強系』とか言うやつなのかな? まさかこんな機会が巡ってくるなんて人生分からないなあ。って、あんな小さい子まで居るの?! 転生とかチートとか言っても理解できないんじゃないかな……?」

「チートも無敵も不老不死でも何でもありだ! もちろん原作介入も

OK!」

「原作ってなんだよ? まさかマンガとかゲーム!? 魔法とか撃ちまくり!?!」

え？ちよつとまっつて！そんな事したら話がメチャクチャになるじゃないのかな？

「ちなみに原作で起きた大きな事件は必ず起きる。妨害しても修正力が働くからな！」

考えていたことが？！もしかして心を読まれた？！あ、説明の続き？

「ただし！持てる力にも限界があるからな！魂の強化はしてやるが、既存の生物をあからさまに無視する事は出来ない！」

ともかく考える余裕はありそう。あんな小さい子を放って置くのも目覚めが悪いし、声をかけてみようかな。

「転生先の世界は『魔法先生ネギま！』変更は認めない！」

ね、『ネギま！』？読んだ事はあつたと思うけれど、結構危ない世界だったような？普通に考えたら学生に混ざったり、魔法使いの弟子になったり？……それよりもあの子を何とかしないとね。

「それじゃ！魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種でよろしく！」

あの人もう決めてるよ。そっちは放っておいてっつと……。

(ねえ、ちよつと良いかな　?!)

そう声をかけようとして声が出せず、その場から動くことも出来

ない事に気がついた。

(声が出ない?!)

驚いて声を上げようとするとするも相変わらず声が出てこない。何かおかしい……。そもそも私はどうして死んだんだろう？

ここに来る前を思い出してみようするものの、霞が掛かったように思い出せない。

「よし決まったな！じゃあ泉に飛び込め！」

「おっし！行くぜ！」

なかなか爽快な音をたてて飛び込んでいく様子が見えた。

こんな短時間で決めていってしまうなんて、何も不思議に思わないのかな？

『自称神様』を見ながらも、必死に違和感の理由を考えるも纏まらない。考えている間に次々と飛び込んで行き、気が付けば私だけになっていることに気づいた。

「さてあとはお前だけだ！転生するつもりが無いのなら、輪廻に戻ってもらうぜ？」

そ、それはイヤ！なんとか話を聞かないと！

「あ、あの、質問はしても良いですか？」

とつても笑顔が眩しい筋肉な『自称神様』。もうマッチョ神でいいや。それにそう聞いてみる。

「よかろう！何が聞きたい！」

よ、良かった。まだセーフみたい。違和感もそうだけれど、いつどこでどんな風に生まれるのか聞かないと！

「ええと、『ネギま！』の世界に転生するのは分かったんですけど、原作のどの時代とどこで生まれるか、どんな種族とかはそういう予備知識？とかが聞きたいのですが」

「おおそうか！つまりお前は俺様の暗示が効いてないんだな！」

え？！暗示？ちょっとまって暗示って、何……。

「そうかそうか、さっきから妙に考え過ぎるやつだと思っていたが、なるほどな！」

そういうとマッチョ神は『壮絶な笑み』という類を見せてきた。というか眼が笑ってない！こ、これってかなりヤバイんじゃないかな？！

「さっきから余計な事ばかりしようとしてるのが眼についたからな！黙らせて動けなくしていたんだが、なかなか楽しめそうだな！」

これは洒落にならない状況ってやつ？しかも体が動かないし、声も出ない。いや震えて何も出来そうにないんだけれど。

「というわけだから、お前は部下決定！」

部下？部下ってどういうこと？！もしかして助かったのかな？でも、マッチョ神の部下ってそれはそれで凄くイヤな予感があるんですけど……。

マッチョ神の顔をみているとニヤニヤ笑いに変わっていて、嫌な予感がどんどん加速していく。

「まずお前に『神核』を入れる！これは神、あるいは天使や眷属である証明だ！」

『神核』？というか天使？普通に転生すら出来ないということかな？

考えていると、マッチョ神の右手から良く分からない色の光の玉が出てきた。

「これが『神核』だ！飲め！」

え？飲めって、どうやって？！

「早くしろ！口をあければ勝手に入る！」

う………。仕方が無い。このまま輪廻の輪に飛ばされるよりはまし様な気がするし、聞けなかったことも部下って事は聞ける機会もあるよね？

とりあえず両手でマッチョ神の右掌に浮かぶ光の玉を受け取ってみる。

あ、何か普通にもてた！あとは口元に持っていけばいいのかな？

「うあ……。ぐぐぐう」

なんだか女子失格な声を出しながら、光は一向に動こうとしない。

「こっやるんだ！」

そういつとマッチョ神は思いつきり口に光の玉を押し当ててきた。

「げほー！げほー！」

思いつきり咳き込みながら光を飲み込んでしまった。

と言うか、何の味もしないんですけど！せめて甘ければ！光に甘  
いって無茶かなあ。

「よし！じゃあ逝って来おおおおい！」

「ええ”?!」

考える暇もなく、私の身体を持ち上げると泉に向かって放り投げ  
た。

バシャアアアアンと、激しい水音を立てて私の意識は暗転して  
いった。

**第1話 神様に出会ってしまった(後書き)**

1話目終了です。

## 第2話 目覚めてみれば

「あはは、ここってどこかな？」

周囲を見渡してみる。回りは海。足元は岩場。以上。

いきなりハードモードですか？せめて何か……、部下じゃなかつたんですかマツチヨ神。

「うむ！またせたな！」

「ひゃああああ！」

唐突に背後から声がかかり、驚いて振り返ってみると、マツチヨ神。

もしかして意外と良い人（？）なのかな？……と、とりあえず聞くだけ聞いてみないと！

「えっと、質問の続きってして良いですか？」

ダメかもしれないけれど、とりあえず聞いてみよう。聞かないよりはましだよな。

「よし！『神核』はちゃんと機能してるな！これから転生特典だ！ちゃんと受け取れよ！」

ダメだった……。このマツチヨ神、全然人の話を聞いてないよ。あれ？と言うか今の私って人間なんだろうか？『神核』とか言うのが機能してるってことは、人間じゃなくなってるのかな？全然実感がわかないんだけど。

「 § % ! 」

うん、もはや理解不能。相変わらず何を言いたいのかまったく分からないマッチョ神だよね。

そう思っていると海がまったく波立っていないことに気が付いた。

「何、これ……」

思わず呟いてしまっくらいおかしい。しかも海どころか世界中から色が失われていつている。白と黒だけの世界になったところで、マッチョ神は私の身体を再び持ち上げた。

「全ての光と闇の精霊ども！貴様らの神が命令する！ こいつと混ざれ！」

な？！せ、精霊って、しかも全部？！

そう考えているうちに周りから白い尾を引いた光の玉と、黒い残像を残しながら闇色の玉が迫ってくる。

「ちょっと！何するんですか？！マズインじゃないんですか？！」

もはや完全にパニック状態。いくら天使（？）だか部下だかになったとしても、全部とか正気かと！そうは思っていないでも、視界はもはや白と黒とマッチョ神だけになっている。

ううう……なんて嫌な光景。あ、意外と余裕あるじゃない。

「問題ない！世界の時間は停止済み！地球と火星に行き渡らせるための神力も十分だ！」

世界の時間は停止って、伊達にマッチョじゃなかったんだ……。そんな事を考えていると、どんどん私の手足の端から光と闇が入り込んでくるのが分かる。

「あぐ！やめ……あああ！」

痛い！

他の感情、思考が追いつかない。手足が砕けて再生してまた砕ける。手足が一通り砕けて再生したら次は胴体。頭。そして魂。意識を失うことも出来ず、集まった精霊の気配がなくなると同時に、私の身体も心も光の粒子となって空気中に溶け消えていた。

光の精霊3柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！光の3  
矢！

（『声』が聞こえる……）

魔法の射手！闇の21矢！

（呼ばれた様な……）

！

！

影の精霊7柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！影の7  
矢！

( 私を、……呼んでるの？ )

!

!

光の精霊101柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！連弾・光の101矢！

( やっぱり私を呼んでいる、デモ、ワタシツテナニ ? )

「適応完了。セフィロト・キー、『リライト』！」

急に目の前が晴れてゆく。ここって何処だっけ。

「ごめんなさい！大丈夫？！意識はある？！」

随分と心配している様な声が聞こえるけど。

「再構成は問題なさそうだけれど、どうも意識がはっきりしてないわね……。」「

再構成？何の事……？

「ごす！」

「いったあああああああ！いきなり何するの?!」「

痛すぎる！なんか大きなハンマー持ってるんですけど！何この人いきなり殴るなんて！でもこんな痛みってあのときに比べたら……。あの時?……あ。

「あああああああ?!」「

「ごす！」

「痛いってば!」「

痛みに耐えつつ叩き続けてきた人を見てみると、何かすごい美人が居た。

「やっと気がついたわね。めんどくさい事になってるけれど、結果的にOKよね！」

「OKじゃないです！何ですかいきなり！」

「助けてあげた割りには随分じゃないの？」

「え?!」

助けてあげた？誰を？私？助けるって何から……。

「馬鹿マツチヨからよ」

って、心読まれた?!またなの!

「まずは謝罪ね。本当にごめんなさい。二重の意味で貴女には迷惑をかけてしまったわ」

「二重ってどういう意味ですか？」

とりあえず、マツチヨ神が1つなのは間違いなさそうだな。もうひとつは何なのかな？

「2つとも馬鹿マツチヨよ」

また心が読まれてる……。気にしたら負けかな？

「大丈夫よ。きちんと説明するわ。まず1つ目は、死者の魂が輪廻へ向かうときに勝手に連れ去った馬鹿の事」

勝手に……?あの転生つていきなりだと思ったけれど、そんな理由があっただ。

「それから2つ目は、あいつが勝手に天使にした上に、セフィロトを使わざるを得ない状況になってしまったこと」

あゝ。やっぱり天使にされたのってまずかったんだ。そりゃ人間がいきなり天使とか神様とかになっただら大変そうだなものね。

「残念ながらすでに下級神よ」

「えゝ」

「えゝ、とか言わないの！」

でも下級神といわれてもね。実感も無いし、やっぱり心読まれ……しまったまた負けた。

「ぶつちやけ貴女が天使になってもそこは問題ないの」

問題ないんだ？じゃあ、どこが問題なのかな？

「馬鹿マツチヨが創造したこの世界は、彼の『神核』で維持していたけれど、すでに処罰により彼は消滅しているのよ。けれども生まれてしまった世界自体を消すことは誰であろうと重い罪、世界を消さないためには馬鹿マツチヨの眷族である貴女の『神核』を活性化して、管理を手伝ってもらうしかなかったのよ」

ちよつとまつて、……相変わらず嫌な予感しかしありませんが、拒否権もなさそうだし。

「無いわね。さっきも言ったとおり世界を創造したら管理するのが神の義務。不条理ながら貴女にはすでに義務が発生しているわ」

「えゝ」

「えゝ、言わない！」

「すー！」

痛ったい！ループですね、分かります。しかし世界の管理かあ……。（意識の上では）さつきまで学生だったのに無茶振りするなあ。

「あとセフィロト・キーの説明ね」

「セフィロト・キー？」

「そう、まあセフィロト、生命の力が乗せられれば何でも良かったんだけど、この世界との相性の問題でね。鍵の形で『リライト』って魔法で再構成するのが一番適応しやすかったのよ」

『リライト』、……それって、なんとなかっていう魔法世界の組織が使っていたような？

「そうそれね、問題はセフィロトの力は1つの魂に対して、生涯に1回しか使えないこと。分解された貴女を早期に再構成するには手取り早かったからと言うのと、馬鹿マッチョの『神核』のエネルギーを受け止める器まで一気に成長させる必要があったって事かしら」

何いいいい！マッチョ神を取り込んだの？！それは生理的に無理！キモ過ぎる！

「拒否権は無いわよ」

……ですよねー。

「彼の人格は消滅して純粋な神力だけだから安心しなさい。再構成

したついでに神格も上がったことだし、天使名も命名しておいたわ。  
光と闇の精霊の影響で銀色だらけになっているから、貴女はシルヴ  
イアね。階級の権天使 アルケー をミドルネームに、今世では精  
霊体だから精霊信仰の『アニミズム』からとって、シルヴィア・A・  
アニミレスよ。頑張っ  
てねシルヴィアちゃん  
」

なんですとー?!

第2話 目覚めてみれば(後書き)

2話目終了。

### 第3話 そろそろ説明してください

「じゃあまずはこれを渡しておくわ。あと貴女の管理者としての使命もあるからきちんとかんしてね」

本？丁寧な装丁だけれど……、転生の説明は無しなのかな？聞きたいこともあるんだけど……。

「なにかしら？」

そろそろ心を読むのを止めてください。とりあえず順番に……かな？

「ええと、私のほかにも何人が居たと思うんですけど、小さい子とかも居たし流石に私みたいな事になっていたらかわいそうだなあつて……」

成人していた人も居れば同い年くらいの人も居た。でも流石に子供はねえ。

「それも使命のひとつね。あなたの使命は大まかに3つあるわ」

3つ？管理が1つ目だよ。あの子を助けるのも使命みたいだし、あと1つはなんだろう。

「まず1つ目はこの世界を存続させること。天使として信仰を集めておくことをお勧めするわ。信仰がなくても死にはしないけれど今の時代ならヨーロッパに行くのがお勧めね」

信仰?! 生き神様として崇められると……。そんな器じゃないと思っただけだな。

「そして2つ目は、『セフィロト・キー』で貴女のほかの転生者の枷を外すこと。」

枷……。? あの子にも何かされているってことかな?

「まず転生者は貴女を含めて5人。まだ他の子は1人も生まれていないわ。最初に生まれるのは200年後に魔法世界 ムンドウス・マギクス ね」

魔法世界……。? なんだかずいぶんファンシーなところだったりするのかな?

「ずいぶんかけ離れたイメージをしているみたいだけれど、わりと現実的で危険な世界よ」

ああ……。やっぱり、マッチョ神め……。

「そこは原作の問題ね。ちなみに貴女が付けられていた枷は『不条理』だから」

え?! 不条理?

「そもそも彼がどうしてこんな事をしたかというと、暇だったらしいのね」

暇つぶし……。? そんな理由で巻き込まれたの?!

「まあ早くに亡くなってしまった貴女達が運をつかんだとも言えるし、不条理に巻き込まれたとも言えるわね」

うん、決めた。なるべく人助けをしよう。不条理を押し付けるのは良くないよね。あ、でもどこかの誰かが善意の押し付けはいらな  
いって言っていたような……。だれだっけ？

「それで転生者達を『セフィロト・キー』で大まかな枷の取り外しと再構成すること。彼が見て楽しむために行われた転生だから、要望に対して曲解、あるいは歪な形で取り付けられているわ。さしあ  
たって200年後に生まれてくる子もそうなっているはずよ」

なるほど。まずはその子の枷はずしかな。うん、頑張ろう！

「転生の時にかけられた枷はさつき渡した本を、本人の前で開けば分かるようになってるわ。近くに行けば本が反応するから、それで探すことね」

ふむふむ。どんな枷をつけられたか想像したくないなあ。やっぱり不幸とか？

「それじゃあ3つ目ね。地球に関しては彼が光と闇を集めてくれたおかげで、幸いにも命の循環に影響は無いわ。『神核』を押し付けて傍観するつもりで居たみたいね。問題は火星にある魔法世界よ」

火星？！魔法世界って火星だったんだ……。それよりも火星に行くなんてロケットとか？そんなの作れないし、持つてる国にお世話になるしか無いのかな？

「魔法世界へ行くための転移ゲートが世界のあちこちにあるから問

題ないわ。特に熱心な宗教関係者には魔法使いが関わっているから、信仰集めにはもってこいよ」

……。天使様を演じろってことかな？騙すようで気が引けるなあ。

「だますも何も天使じゃないの」

……。そうでした。うーんとりあえずはヨーロッパに行つて。

「思考がそれているみたいだけど、魔法世界での最終的な目的は『造物主』のもっている『グレートグランドマスターキー』を食べる」

……。食べる？鍵を？光の玉といい精霊といい、何だか変なものばかり食べてるよね……。いい加減普通のご飯がたべたくなってきたな。

「とは言っても、物語の大きな出来事は必ず起こるわ。そのため2003年の夏に魔法世界で大きな戦争があるのだけど、その戦争で『造物主』を必ず倒すこと。これは貴女が倒しても主人公が倒しても問題ないわ。その後は『造物主』の所有物という設定が無効化されて、管理者である貴女の所有物になる。」

2003年？2000年後にあの子が生まれるとして、今何年なのかな？何だか嫌な予感がするんだけど……。

「食べるというのは物理的なものではないわ。比喻。私たち神族にとって人間的な食事のイメージは持たないほうが賢明ね。食事は出来るけれど食べたそばからマナに還元されるから、消化とかは無縁

ね。そもそも貴女にも物理法則は当てはまらないから慣れる事からはじめなさい」

とりあえず200年の間は、身体を慣らして、教会に接触、あの子を助ける。になるのかな。

「最後になるけれど本の説明ね。まず表紙を開いてみて」

ええと、……………『シルヴィアちゃんの取扱説明書』

「なにこれええええ！」

私の取扱説明書って何?! 転生者を探す本じゃないの?!

「貴女、自分の体のことや魔法の扱いとか解る? そのあたりどうなっているのか初級から中級魔法の教本をかねた説明書よ。もちろん『セフィロト・キー』もその本の中に入っているわ」

そうですね……………。そもそも自分の体って今どうなってるのかな? 天使って事は翼が生えてたり?

「はい、鏡」

そういうと姿見がどこからともなくいきなり出てきた。普通にチートだなあ。いや、魔法なのかな?

「……………え?!」

「そんなに喜ばなくていいわよ」

だれこれええ?! 顔は面影があるような気がするけれど、明らか

に私じゃない！すつごく可愛くなってる！それに確かに銀色だらけだね……。

髪は銀色のロングだし、紫の瞳も光の加減で銀っぽく見える。今まで気にならなかつたけれど銀色の翼がちゃんとある！って、意識したら何だかむず痒くなってきた？！

「むあわわわわ！」

混乱気味にがむしゃらに翼を動かしはじめてしまった。

何だか余計に変な感じが！

「おちつきなさい」

「ぐす！」

「痛った！」

「おちついたかしら？とにかくヨーロッパに移動するから手を出しなさい、引っ張るから飛びながら慣れること。いいわね」

そ、そんな無茶な〜！

考える間も無く手を引かれ、その場から飛び立った。

第3話 そろそろ説明してください（後書き）

3話目終了。

## 第4話 魔法は初心者！

はい。そんなわけでヨーロッパです。現在は西暦1100年くらい。最初に『ネギま！』につれて来られて精霊（中身は天使だけれど）になってから、1800年ほど無意識で精霊に溶け込んでいたようです。気が付いたら年齢だけはおばあちゃんを遙かに超えてるって……。うん、あまり考えないようにしよう。

容姿については、「天使様やるんだから見目麗しいほうがいいですよ！」と一蹴されてしまいました……。まー、確かにそうなんだろうけれど……。嬉しいと言えば嬉しいんだけど自分じゃなさ過ぎて微妙。

今居る場所は、とにかく森。森。森。大事なことなので3回言いました。助けてもらった女神様（現在の上司らしい）に連れられて森の中まで飛んできて（飛ばされてきて）家だけは作ってくれました。現代風のベッドルームとリビングにバスルームのサービス付き！現代人に中世とかの生活は厳しいです！洗濯機が無い！って言うたら服は魔力で編まれてるから汚れないそうです。白か黒のゴシックドレスしか無いんですがいぢめですか？白はともかく黒で天使しろって無茶ですよね！

それから翼が邪魔です！って言うたら無理やりぐいぐい押しこまれて、見事に消えました！出せる自身はありません！

なんだかんだとやり取りした女神様は、「じゃ、あとは頑張りなさい」って帰ってしまいました。しまった、名前を聞いてなかった。マツチヨも知らないけれどももう居ないらしいからそっちはいらなかな。上司らしいし、また会う機会もあるよね？

「とにかく説明書の確認かな。何が出来るかわかっておかないと信

用も何も得られないよね」

『シルヴィアちゃんの取扱説明書』とか、1ページ目に底抜けに明るい字で書かれた本を読んでみないことには始まらないし。

「どれどれ〜っと」

シルヴィアちゃんの取扱説明書 を、簡単に説明すると。

・本は自身の魔力で構成してあるので、念じると体内にしまうことが出来る。

・転生者が生まれる年代に近づくと表紙裏に大まかな情報が出る。転生者の前では本が発光する。

・本は『セフィロト・キー』を使い終わった時点で消滅する。

・『セフィロト・キー』は裏表紙に手を当てて召還する、ただし転生者4人分まで。

・魔法発動体を介せず精霊を集合させて魔法を使える。詠唱は必要だが始動キーは要らない。ただし光と闇はその限りではない。

・身体を損失しても再構成できる。応用すれば大きさも変えられる。

・翼の分解と再構成による出し入れが出来る。

・特定の相手を祝福できる。ただし光か闇限定。

・仮契約を行うと、従者は半精霊化する。実質不老。

・本契約を行うと、従者は眷族になる。実質不老不死。

「なんだか、随分とチート仕様な気がしてならないんだけど、大丈夫なのかな……。とりあえず、契約とかは慎重になろう。あの神様みたいな事はしたくないよね。」

「時間は有るんだし、練習！外で色々試してみようかな」

「ともかく静かな森の奥。人も来なさそうなくらい深いから魔法使っただけでもそうそうばれなさそう。」

「ええと、教本の部分は……、あつたあつた、後ろのほうのページだね」

魔法初心者は灯火から 魔法少女なイメージでレッツトライ

「これは……。本気にして良いのかな？」

「うさんくさいなあ……。もうちょっと読み進めてみよう。」

「なにに、魔法をは理論・実践・制御で成り立っている。精霊を扱うための理論が完璧でも経験が無ければ扱いは上手くならない。また制御が疎かであれば集められる精霊も少なくなり、実際の効果も薄いものとなる。」

「なるほどねえ。魔力だけはたくさんあるみたいだけれど、練習しないとダメですってことだね。どこの世界でも勉強は必要か。」

・魔法理論編は、 ページから

・魔法制御編は、 ページから

「実践編は細かく書いてないし、やってみるしかないかな？」

とりあえず灯り？なら危険はなさそうだし。せつかく魔法の世界にいるんだからちよつと憧れるよね

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ！」

ゴオオオオ！

「うひゃあああぁ！」

何かたき火が出来たんですけど！どういう事？！灯りじゃないの？

「つて、このままじゃ火事になっちゃう！水みずミズ〜〜？！」

バシヤアアア！

「冷たい……。水浸しになるほど集まらなくてもいいのに」

外でやっていて良かった……。こんな事になるなんて。相性が良い光か闇からはじめたほうが良いのかな？

「ええと…闇は危なさそうだし、光の魔法にしよう」

・攻撃魔法

集めた精霊の数の分だけ『魔法の射手』を放つ初級魔法。状況に応じて連弾や収束を使い分けられる応用性がある魔法。

#### ・防御魔法

自分の周囲に張り巡らせる魔法障壁と、任意の点や面に収束させる魔法の楯がある。

……。どう考えても楯からだね。攻撃魔法はやバイ！灯りがたき火になったり、消火したいだけで水浸しになるんだし攻撃は危険だよ！

「えっと、自分の周囲に楯があるイメージで……。光の障壁！」

って、まぶしいいいいい！なにこれ！あたり一面光っていて何も見えないよ！もしかしなくてもまた威力がありすぎるっことかな？

「か、解除〜！おしまい〜！」

そういつと、精霊が解散してくれたようで普通の景色にもどってくれた。

「これはダメだなあ〜。制御が出来てないお手本みたいな気がするよ……。当分は制御の勉強だね」

あ、翼の出し入れの制御も出来るようにならないと。課題が山積みだなあ〜。魔法ばかり夢中になってついつい忘れてたよ。まだまだ人間のつもりだし、いろいろ慣れないといけない事が多そうだね。

そういえば私のほかの転生者も人間じゃない種族で生まれてきたりするのかな……。探すときは気をつけないと……。



**第4話 魔法は初心者！（後書き）**

4話目終了。

## 第4・5話 説明と主人公の設定1（ネタバレあり）

### ・作品の設定について

あらすじにも書いてあるのですが、神霊的なものや、『魔法先生ネギま!』の設定の独自解釈と一部の原作改変があることをお断りしておきます。基本的には歴史に沿って原作重視で進みます。

神様の設定に関しては、最上位クラス以外は天使としています。御使いとして世界を管理するという形です。墮天使は悪魔の一種という扱いです。悪魔だから純粹悪というつもりはありません。原作から逸れてオリジナル天界編とかはやらないつもりです。

基本的に群像劇になる予定ですが、1話の間に視点変更をあまり多く入れたくはありません。

大まかな流れは考えてありますが、行き当たりばったりで細かく考えていない部分もあり、「ここはこうだろう!」という詳しい質問には答えられない事をお断りしておきます。

主人公の初期設定（4話終了時点）

名前：シルヴィア・A・アニミレス<sup>アルケ</sup>

誕生：紀元前700年頃生まれ（発生とも言つ）

性別：女性

身長：158cm（マナの調整で変化可能）

体重：物理的な重さが無い。（生前は秘密）

種族：精霊（神格は権天使）

### 【外見】

見た目は生前と同じ16歳程度。

青い地球と赤い火星の管理なら混ぜればいいじゃないと勝手に紫色の瞳にされた。

光と闇の精霊の影響で、銀色の腰まであるストレートヘア。光の反射でアメジストの様にも見える。

色白で西洋寄りだがアジア系にも見える顔立ち。美人ではなくどちらかと言えば可愛い系。

背中に半透明の銀色の翼が左右二対ある。そのうち出し入れ可能になる。

### 【特徴】

マイペースでどこか楽観的、その割に責任を感じやすい真面目タイプ。

精霊であるため、ウエスペルティア王家の『魔法無効化能力』と相性が悪い。

（触れただけで分解されたりはしないが、集めた精霊を散らされる、という意味で。）

生物的な構成が無いため気を使えない。代わりに神力が循環している。

## 【能力】

### ・精霊の集合

上位の精霊として、魔法を詠唱と自身の魔力だけで行える。  
ただし光か闇はその限りではない。

### ・再構成

精霊が存在できる場所ならば自身を再構成する事ができる。  
魔法や物理的ダメージを受けても『神核』は上位世界の存在なので  
致命傷にならない。

### ・精霊の祝福

光か闇に限定されるが対象者の親和性が上昇する。

### ・精霊の加護（仮契約）

契約を行った従者の魂を半精霊化。対象者の得意な属性との親和性  
が大きく上昇する。

超命種になるが、契約破棄により契約前の種族にもどる。

### ・天使の加護（本契約）

契約を行った従者を眷属化。対象者には神核が生まれ精霊（下級天  
使）化する。

肉体ではなく魂的なもので生物でなくなるわけではない。つまり肉  
体を失わなければ気は使える。

シルヴィアの設定の中でおそらく活かさない部分も有りますが、  
作っていて矛盾を含みそうな部分は細かく書きました。

なるべく初期設定を守るようにしますが、設定の追加・若干の修正はあるかもしれません。

原作知識はうる覚えになります。そう言えばこんな事もあったなあ。と言つ程度です。

第4・5話 説明と主人公の設定1（ネタバレあり）（後書き）

ここまででプロローグは終了です。

## 第5話 魔法使いへの道

### ・魔法制御編

魔法の制御を安定させるためには、明確なイメージ。効果の対象をはっきり確認すること。魔法の結果を強く思う事。魔力の収束を洗練すること。

「うーん……。具体的なんだけど、魔力がよく解って無いから、抽象的に聞こえちゃうかな」

こんな事なら、マンガをもっとちゃんと読んでおくんだ……。でも転生なんてすると思わなかったし。人生何があるか分からないね。魔力に関してなにか書いてないかな？

### ・魔力認識・神力認識編

ぺらぺらと捲っていると、都合良いページを発見！

「作為的なものを感じるけれど、分からないとどうにもならないよね。まずは見てみないと」

魔力には体内を循環するものと自然界に存在するものがある。体内魔力だけではなく、自然のものを効率良く取り込むことで、大きな魔力を得ることが出来る。

神力は神族にとって生命の循環を促すものであり、天界と世界と神核を巡る永久機関である。

「……………神様無理です。わかりません」

何だか前段階から話がずれている感じがするな。あ……！もしかしてこれが『不条理』？！枷は外してもらったから、もう無いはずだけれど、そのせいにしたくなるくらい意味が分からないよ。

あ、でも神力は何となく分かるような？こっちは生きるためのエネルギーって事だよね？無くなったらヤバイ感じがするけれど、永久機関って事だから、え？もしかして死なないのかな？

そういえばマツチヨ神が処罰を受けて消滅って言うていたよね。

……つまり、うん、あまり深く考えないことにしよう……。

「それじゃ魔法というか、魔力を使えるようにしないと！やっぱりイメージかな？」

イメージトレーニング開始！魔法自体はダメダメでも使えていたし、弱い威力になるように頑張ろうかな！

あっという間に10年が経ちました。

とにかく毎日イメージトレーニング！光楯を使ったり光の障壁を使ったり、ときどき闇属性の障壁も使ったけれど攻撃魔法はあまりやらなかった。集中してどこに出すのかどれだけ出すのかを頑張りました！とにかく魔力の感じを掴むのが大変でした！

その結果、障壁だけなら割りと自在に出せるようになりました！頑張ったよ私！

「でも、これだけで天使様〜って崇められたりはしないんだろぅな  
あ〜」

崇められるって分かりやすい奇跡が必要だよね……。なんだろう？  
守りも必要だと思っただけけど、やっぱり奇跡の生還！とか、病  
気が治った！とか？そういうえば、攻撃と防御魔法の他の魔法はあま  
り見てなかったなあ……。いけないいけない、ちゃんと見ないと。  
そういえばお腹が空かないんだよね。ちょっと悲しいけれど空腹  
で倒れないって言うのはありがたいよね。口が寂しいから数年前に  
湧き水は見つけました。どこからか分からないけれど水とお湯が出  
てくるバスルームよりはおいしいお水でした！そっか、今の時代だ  
と食事情もあまり良く無いんじゃないかな？美味しい料理が作れ  
たらその辺も評価してもらえるかな？！

って、本題を忘れそうになったよ！

「えっと、他の魔法の種類は〜……っ」と

・治療魔法

外傷を治療する魔法。術者の魔力や技量によって治療できる範囲  
は変動する。魔法具や薬草等を併用すればその限りではない。

・飛行魔法

飛行の補助を行う媒体を使い、浮遊・高速移動を行う。魔力制御  
と運用しただいではその限りではない。

・強化魔法

戦いの歌による自己の強化。魔力の循環により打撃力・防御力を  
飛躍的に上昇させる。

また、契約者に限り魔力供給を行うことで同様の効果を得られる。

「契約……！」

思わず息を呑んじゃったけれど、これは良く考えてからじゃないとダメだよな。私みたいに巻き込まれちゃう人が増えちゃうって事だもんな。

やるならやっぱり治療かなあ……。薬草の知識は無いけれど、勉強できる場所は無いかな？

あとは飛行かな。これは翼を上手く使えば補助を行う媒体ってものはきつといらぬよね？

さらに10年が経ちました。

うーん、意識の上では30代後半か。見た目は10台半ばだけれどね。1830台だつて？そんな声は聞こえません。

そうそう、回復魔法の術は森で怪我した動物とか木々とかで試しました。自分にかけてようにも自傷するわけには行かないし、普通の生き物と違うから効果がちゃんと出なさそうなんだよね。

強化魔法を試してみたら使えませんでした。魔力を纏ってパワーアップというか自分自身が魔力で出来てるのに気が付いて、意味が無いって事で……。

飛行魔法はまだぎこち無いけど、しばらく飛んだり浮かんたり出来るようになりました！翼ではさばさ動くとか格好良いのかもしいけれど、集中が途切れます！羽が4枚もあるから腕が6本あるみ

たいな感じなんだよね。正直全然慣れません。でも天使様を演じないといけないからそろそろこっちを練習した方が良いかもしれない。あとは眠りの魔法とか補助的なものを中心に、やっぱり攻撃魔法は少しだけかな。

「よし！善は急げって言うし、今日からしばらく翼を出したまま生活してみよう！」

あ、なるべく白いほう着てよう、雰囲気も大切だよな。

第5話 魔法使いへの道（後書き）

5話目終了です。

## 第6話 任務は危険と隣り合わせ

私はメガロメセンブリアから極秘裏に派遣された調査隊を預かっている。今回の任務は数十年前から、旧世界 ムンドウス・ウエトウス で何度か観測された巨大な魔力である。

旧世界にあるという聖地で観測されたならばまだしも、ヨーロッパ地方の『黒の森』と呼ばれる巨大な樹海である。ならば何らかの儀式が行われたか、力の有る鬼神・悪魔が召喚された可能性が有る。

しかし、それなら数十年に渡って何度も観測されたにもかかわらず森に異常は見られず、また周囲での大きな事件も報告されていないのだ。これを異常事態と言わずしてなんと言うべきか。

任務において最優先とされるものは、魔力の原因の確認。次に生存して報告。出来れば確保、あるいは討伐。我々がバックアップをする旧世界の組織ならともかく、他所の組織に握られるわけにはいかないのだ。最悪の場合、他の組織と出会えば戦闘もありえるだろう。

「隊長。今のペースならば。早朝には黒の森にたどり着きます」

「よし。他の組織に警戒を回しつつ、森の手前で休息を取る」  
「了解！」

現在私が率いている部下は2人。相手の交渉も考慮した上で精鋭を用意し、男2女1の編成である。交渉が出来る相手があり、有利な契約を交わせれば上等。最低でも情報は握りたい。しかし現実的に考えるならば、儀式跡と何らかの組織・グループの痕跡程度であるろう。

「隊長。野営準備完了しました」

「ご苦労。結界を張りつつ交代で見張りに付く」  
「了解！」

さて、早朝には森に入る。どこまで探索が可能だろうか。魔力反応は幸いにもほぼ特定の範囲である。我々の足ならば、半日もかからずにたどり着くだろう。

あたし達はわざわざ旧世界に来ている。こちらでは大きな声で魔法を使えないし、暗躍する魔法団体も数が多い。今朝、調査の目的地に到着。ちょうど黒の森内部の探査指定範囲に向かって駆け出している。

正直なところめんどくさい。旧世界の事なんだからそつちで勝手にやってほしい。

「まったく。なんであたしが……」

「口を閉じろ、コードエイト」

「はい」

ぼやけばすぐこれだ。隊長は固すぎるのよね。コードネームエイト、それが組織でのあたしの名前。隊長はデルタ。割とまじめなもう一人の隊員はセブン。数字の名前なんて華もあつたもんじゃないわ。いい加減仕事変えようかしら。かといって裏組織にいる身。簡単に変わったり出来ないのよね。

「そろそろだ、警戒を怠るな」

「了解！」

「はい、了解」

目的地に着いたもののやっぱり森が広がっているだけにしか見えない。探査魔法をかけてみるものの、何かの儀式の痕跡は感知できなかった。

「このポイントは終了。次のポイントへ向かう」

「了解！」

次……、ねえ。今も魔力反応は無いんだし、儀式跡でも見つかるかどうかってレベルじゃないかしら。

「次のポイントだ、北北西へ1km進む」

「了か……?!」

「え?!」

寒気がした。唐突に巨大な魔力の気配。これは明らかにヤバイ。こんな魔力人間が出せるレベルじゃない、それこそ鬼神やヘラスの守護聖獣でも目の前に居るかのよう！

「た……隊長、どうしますか?!」

「あ、あたしは帰りたいな、なんて……」

「馬鹿者！調査する絶好の機会ではない！」

「り、了解！」

「了解！」

冗談じゃないわ。こんなのと対面するのなら反逆者扱いでも逃亡したほうがマシってものよ！けれど魔力反応はかなり近い。急に出た辺りもしかしたら待ち構えられていたのかもしれない。

一瞬、死が頭をよぎったけれど、あたし達は行くしかなかった。

なんという事だ。調査隊には精鋭を連れてきたはず。たとえ敵対組織や大量の召還魔が居たとしても、反撃しつつ好転、あるいは逃走は可能だと踏んでいた。しかしこれほどの魔力では無事に逃げ切るのはまず無理だ。最悪の場合は私自身が囿となり、報告を部下に任せる事になるだろう。

「隊長！反応捕らえました。西に100mです」

「よし。私が先行する。エイトは私の後方に。セブンはこの場で待機して観測。最悪の場合は即座の逃走の準備を」

「了解！」

「観測準備開始します！」

覚悟を決めるしかなさそうだ。そう思いつつじわじわと歩みを進める。正直、息が詰まる思いだ。魔力からは害意が感じられない事がせめてもの救いだろうか。

そうしているうちに念話の魔法が届いた。

（こちらセブン！魔法障壁の展開が確認できます！かなりの魔力です！）

（了解した！）

魔法障壁だと？これだけの魔力を障壁だけに使っているとは考えにくい。障壁を張った中で何かを行っていると考えるのが自然か。

いやまで、ならばなぜ結界ではなく障壁？おかしい。何者かが居るのは確定だが、怪しすぎる。

ガサガサ　！

！しまった、別の組織が居たか！どうする、現状で動くのは危険すぎる

「魔法の射手！氷の7矢！」

「ぐっ！」

「きゃっ?!！」

しまった、手前を凍らされた！これでは先に動くのが遅れる！逃げればみすみす原因もどこの敵対組織かも解らないまま終わる！

「契約に従い　我に従え　氷の女王　来れ　とこしえのやみえいえんのひょうが！」

氷結の封印魔法か！まずい！この距離では巻き込まれる！

（　セブン！今すぐ逃走を……?!）

（隊長?!何が!）

パアアアアン！

くう！あちらの障壁が解除されたか！あれだけの魔力障壁だ、上級殲滅魔法の封印術を防いだか。しかしやつらの後衛がすぐやって来るだろう！この機に逃げるしかないか?!

「 来れ風精 光の精 光りに包み 吹き流せ 光の奔流 陽光の息吹！」

何?!原因の方から反撃?障壁を張っていた魔法が解けたにしては建て直しが早すぎる!!あちらは何人い !馬鹿な!少女1人だど?!

少女に見入っているうち、敵対組織と思われる者たちは光に包まれ、遙か遠くへ吹き飛ばされていた。

## 第6話 任務は危険と隣り合わせ（後書き）

6話目終了です。

現在のストックはここまですなります。

次話は、推敲と矛盾点の確認しつつ、ストックを溜めてから投稿となります。

1月4日魔法に対する補足を追加。

シルヴィアが使った「陽光の息吹」に関しては、「雷の暴風」を参考に、勝手な解釈に基づくオリジナル魔法です。

攻撃魔法に対して遠慮があるため、得意な光で拘束、風で吹き飛ばして怪我をさせたくないという考えから、このような形を取りました。

## 第7話 魔女狩り（前書き）

思いのほか筆が進んだので、再び連投になります。

## 第7話 魔女狩り

「我々は蒼の騎士団である！【黒森の白魔女】よ！我らの裁きを受けよ！」

そう宣言した男は大剣をかざして中央に立ち、魔法使いと思われる数名の男達は杖を持って魔法を詠唱し始めた。

どうしてこうなったのかな……？

色々な魔法を使えるようになったのは良いんだけど、変な団体が来るようになりました。

別に悪い事はしてないよね？森の奥で魔法の練習をしているだけだし、森から出てもない。翼の練習はしてるけれど、まだ派手な事はしないほうが良いって思っていたから、コッソリとしています。いつの間に魔女認定されたのかな？

このままじゃまた問答無用で襲い掛かってくるし、魔法障壁張って諦めてもらおうかな。

「光の障壁」

自分を囲んで姿を隠すようなイメージで眩くと、私の周りに光の魔法障壁が展開される。

とりあえずこれで凌いでいたら諦めてくれると嬉しいんだけど、また魔法で脅したりしないか帰ってくれないかなあ……？

「雷の精霊27柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！連弾・雷の27矢！」

パシィ！

魔法の射手を波状攻撃して来るけれど、今の私の障壁ならそれくらいは効きません！最初に襲われたときは加減が解らなくて、最初に魔法を使ったときみたいに物凄い魔力で障壁張っちゃったけれど、防御に関してはこれくらいかな？　　というのは、少し分かるようになってきました。

魔法使いの人たちは何とでもなりそうだけれど、騎士っぽい人はどうしよう……。普通の剣じゃ突破されないけれど、魔法使いが居るから多分普通じゃないよね？

「　氷の精霊7柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！魔法の射手！氷の7矢！」

……え？こつちじゃなくて別の方向に？何で向こうに撃つて、……ってまた別の団体が居るよ！あの人達に攻撃したって事は、仲間じゃないんだよね。どうしよう、挟み撃ちにされちゃうと困っちゃうし、でもあつちの人たちは何だか困ってるみたい……。

「　契約に従い　我に従え　氷の女王　来れ　とこしえのやみ  
えいえんのひょうが！」

え？何それ聞いた事無い魔法。氷河とか言ってるから、大きな氷の魔法って事かな？

さすがにマズイ　　?!

パアアアアン！

キャー！し、障壁が吹き飛んじゃった！どうしよう！とにかくあの人達はどっか行ってもらわないと！なるべく吹き飛んでも傷つ

けないイメージで……！

「来れ風精 光の精 光りに包み 吹き流せ 光の奔流 陽光の息 吹！」

しつかりとした声で魔法を唱える。淡い光が蒼の騎士団とか言う人たちを包んで拘束、吹き荒れる風が騎士達を舞い上げて彼方へと飛ばした。

「魔女めええ

！」

「うわー……。飛ばされる時まで魔女認定してくれなくてもいいのになあ。諦めてくれないかな？まだもう1つ団体が居るしどうしようかな。やっぱり魔法障壁をもう一度張ろうかな？」

「ねえ……。ちょっと良いかしら？」

「あ、ハイ？」

……。あ！思わず返事しちゃった。

「エイト！勝手に接触をするな！」

「でもこの娘は無害そうじゃない？ぼけーっとした感じで」

無害認定もらえた！この世界で会った人で初めてかもしれない！  
というか私はぼけーっとして無いよ！してないよね……？

「まあ良い。失礼お嬢さん。少しお話宜しいか？」

もしかして襲ってくる団体さんと目的が違う？この人たちも怪しいけれど、悪い感じはしないし、問答無用で攻撃してこない分話

出来そうだよな。あ、すっかりしないと。ポケッ子認定されちゃうのはイヤかな。

「はい、何のご用でしょうか？」

「ちょっと硬かったかな？相手が居て会話をするのも久しぶりだし

「我々はこの森で過去数十年に渡り、大きな魔力が何度も観測された原因を調査に来た。お嬢さんが魔法使いであるのは解るが、何か特殊な魔導具を持っていたりしないだろうか？」

「バレてる……？というか観測って？魔法を使うと魔法使いには分かっちゃうんだ……。」

「隠れていたのは正解かもしれないけれど、これじゃ魔法の練習をどこでしていても同じって事じゃない……。それで魔女狩りって団体が来ていたんだね。」

「何て答えよう。真面目そうな人だし、正直に話したほうがいいのかな？」

「ええと、私はこの森で魔法の練習をしています。魔法の練習をしているだけで、特に何かを見つけたり迷惑をかけたつもりは無いですよ？」

「魔導具って何か？私の本に書いてあった『魔法発動体』とか言うやつ？そういうのは持って無いし要らないって書いてあったと思うんだけど。」

「ふむ。それならばお嬢さんの魔力が異常に大きいだけなのだろう。他にこの森で練習する者や集団を見たことは無いだろうか？」

「集団ならさつきみたいにいきなり襲いかかってくる人達をたまに見たくらいです。問答無用なんで防御魔法を使って逃げたりしていません」

「ねえ貴女。さつきから随分軽装に見えるけれど、こんな森の深くまで飛行媒体や野営道具とか持つてきてないのかしら？ 獣の対策もしてるように見えないのよね」

あれ？なんか疑われてる？何か変な事言っただかな……？

「ええと……私はここに住んでるんでそういうのは要らないかなあつて……」

「住んでる?!」

そんな声を重ねて驚かなくても良いと思うんだけど。確かに森の奥だけれど、住もうと思えば住む人居るよね？ 自然派志向の人とか、世捨て人とか。

「つ、つまりお嬢さんは、この森には詳しいと?」

「え? 私の家がある周辺くらいですけれど、一応湧き水とか分かりますよ?」

「ねえ、『魔法発動体』……。持つてるように見えないのだけれど、どうやって魔法を使ったのかしら?」

え? 『魔法発動体』って魔法使うのに必要なの? 要らないって書いてあったから特殊なものだっと思っていただけだけれど、もしかしてまづいのかな?

って、このおじさんあからさまに警戒した顔になってる! 本当にヤバそう!

「まさか儀式で転化した魔女だっというの? 冗談じゃないわ!」

「待てエイト！落ち着け！」

「冗談じゃないのはこっちです！初めて無害認定されたと思ったら結局魔女ですか！理不尽じゃないかな！とにかく魔女じゃないって説明しないと！」

「あの！私の場合『魔法発動体』ってのが要らないって書いてあつて！」

「書いてある?!」

「どづいづ事よ！」

ああああ！何だかますます泥沼になってきたような！

「隊長！遅くなりました！観測結果出てます！」

「セブン?!待機を命じたはずだ！」

「戦闘終了してる様子なのに、指示無し、連絡無しじゃ様子も見に来ますよ！」

「……む！たしかに」

観測？調査に来てるって言うていたから、何かを調べてたんだよね？何を調べたのかな？

「それでセブン。わざわざ現場に来るほどか？念話で済むだろう」

「それが結果を見る限り戦闘になったら、かなりの危険と判断しまして、最悪の場合は間に入ろうと思……」

「！結果から言え」

「了解！結論を言つと、そちらの女性は『精霊系亜人種の様に見える何か』という事が分かりました！」

精霊系亜人種？

確かに人間じゃないって分かってるけれど、何だろう……なんか、悔しいな……！

第7話 魔女狩り（後書き）

7話目終了。

## 第8話 亜人の様に見える何か

「『精霊系亜人種の様に見える何か』だと？」

「はい。しかも観測された魔力のパターンは一致。この女性が原因であるかと」

原因？知らないうちに迷惑かけたいたのかな？もしかして襲ってきた団体って、何か迷惑をかけた原因を解決しに来てたのかな……？

「なるほど……。つまりお嬢さんが数十年前から魔法の修行をここで行っている……と。確認だが間違いないだろうか？」

「……え？ハイ。してました」

ああ、どうしよう。知らないうちに迷惑をかけて居ただなんて。

初級魔法が出来るようになった時にもっと森の外もちゃんと見ておくんだっただ……。どうしよう。

「順番に確認をしたい。どうか我々の話を聞いてもらえるだろうか？」

「はい……」

そう言っただけじゃないよね。迷惑かけていたならちゃんと謝って、それからどうしよう。

「まず、ここで魔法の修行をしていた理由は何だろうか？必要ならば、学院や教会など連絡を取る手段はあるはずだ。『魔法発動体』が要らないと書いてあるという発言も気になる」

『魔法発動体』ってやつぱり重要なものなんだ？とりあえず魔法の練習の理由は……何だろう？使ってみたかったって言うのもあるし、信仰集めのための準備？

「えっと、『魔法発動体』は私の先生みたいな人から、無くても問題ないって言われました。魔法は憧れとか必要だったから練習してただけで、これからやら無いといけないこともあるし」

「目的があるのか？」

「うわー。何かまた一層警戒した顔をされちゃったんですけれど！もうどうしようこれー！」

「精霊系も何も、亜人種が旧世界 ムンドウス・ウエトウス に居る時点でおかしいのよ！あいつら魔法世界 ムンドウス・マギクス から出ようとしないし！」

「エイト！勝手はするな！」

「あー、もう！分かりました！」

人型の精霊って魔法世界にいたんだ……？向こうに行ったらこそそしなくていいのかな？

「すまない。率直に聞くが、お嬢さんは”何”だ？」

何って言われても……。どうしよう。天使です！って言ったら頭がおかしい人って思われるかな？そもそも魔法世界には普通に亜人が居るって言うていたよね？あれ……？ちょっとまって！

「あの、もしかして貴方達は魔法世界の方ですか？」

「何の事だ……！」

あ、動揺してる。魔法世界って現実的で厳しいって言うていたけれど、むしろよっぽどファンタジーな気がするよ。

「我々が何者が説明したら、お嬢さんの正体を明かしてくれるか？」

うーん……。信用第一だね。迷惑かけていたらちゃんとして謝りたい。人間関係は良くしておきたいかな。信用してもらえるように話してみよう。

「はい。説明してくれたら、私もちゃんと話します」

「……了解した。まず私は、魔法世界にあるメガロメセンブリアから派遣された、魔法調査隊の隊長だ。コードネームで失礼するが、デルタと言う。」

「同じく隊員のエイトよ」

「セブンです」

「えっと、シルヴィアって言います」

コードネーム！秘密組織とかが使ってるイメージだね！あれ？っていう事は魔法世界まで迷惑かけてたって事？こ……これはヤバイんじゃないかな？！

「う、ごめんなさい！」

日本人よろしくとばかりに思いつきり頭を下げて謝罪！  
思わず謝っちゃったけれど、許してもらえるかな？！

「はあ……？」

「何をいきなり謝ってるのよ」

「え……？魔法使った事を怒りに来たんじゃないんですか？」

あ、あれー？なんか呆れられてる？ちょっと違ったのかな？謝り方が間違えてた？魔法世界式の謝り方ってどうやるんだろう！

「シルヴィアさん。我々は原因不明の魔力の原因を調べに来ただけだ。怪しい集団の策謀や、テロリストでもなければ咎める理由も無い。どうか頭を上げてほしい」

勘違い？でもそれじゃ謎の団体達って……。

「え、でも、いろんな人たちが魔女っていきなり襲って来たから、何か悪い事をしてしまったのかと思っちゃいます……」

「それは旧世界の冒険者や団体が、名を上げたり政治利用するために始めた魔女狩りの余波だろう。魔法を使っているだけなら、どこにでもいるぞ」

え、冤罪ー！！まさかそんな理由だったなんて……。中世の魔女狩りの酷さは歴史の教科書には載っていたけれど、自分がその立場になってみると随分と無茶苦茶だったんだね。

「我々の説明はこんなところだ。次は君の番だが？」

「あ、はい。でも、信じてもらえるかどうか……」

「まず、話すだけ話してみてください。我々としても疑問はあるのでね」

それじゃ翼を出して、説明……。かな。魔法世界の人たちだったら、ゲートっていうのも貸してもらえたりしないかな？

集中して翼を出すイメージ。天使の姿に　！

「え?!」

「馬鹿な……」

「隊長！幻術や魔導具の観測はありません!」

やっぱり驚いてるよね……。

翼に飛行魔法を意識して浮かび上がる。

演出は大事という事で。信用してもらえないかな？

「えつと、こんな感じなんですけど。人間じゃないのは確かです」

「魔族……では無いのだろうか？悪意の有る波動は感じないし、何より透き通る銀の翼など聞いたことが無い」

魔族？あ、やっぱり悪魔とか居るんだ？魔法があつて神様とか天使が居る世界だものね。悪魔とか居たつて不思議じゃないのかな。今はそつちは置いておいて、私の事の説明だよね。

「一応天使……です。使命があつてこの世界に来たんですけれど、その準備のために魔法は練習してきました。地球と魔法世界のどちらにも用事があるので、魔法世界の人とちゃんと話をしてみたかったです」

信じて……もらえるかな？奇跡的な事はまだ出来ないけれど、あの程度は魔法で何とか出来ると思うんだけど……。

「隊長。あたし軍を抜けます」

「ハア?!」

「エイト！いきなり何を言い出す!」

「シスターになります。と言つかこの子マジ天使」

「え」

な、何この人。態度変わりすぎじゃないかな？

「だって魔法隊の任務はもう飽き飽きしてたのよね。どうせ隊長だ

ってこんな爆弾見つけて放置する気はないでしょ？だったら私達の息がかかった教会に匿って、連絡を密にしてもらうのが有益なんじゃないかしら？」

「それはそうだが本人の前で策略を暴露するな！」

「イヤよ。だって私この子に味方するってもう決めたの」

無茶苦茶だ〜〜！

「と言っわけだからよろしくね？天使ちゃん？」

そう言つとエイトってコードネームの女性が腕に手を絡めてきた。

第8話 亜人の様に見える何か（後書き）

8話終了。

## 第9話 森からの旅立ち

何この状況……。

「へえ〜。天使の翼ってこんな風になってるのね。一般人に紛れ込んでいても分からないんじゃないかしら？」

わさわさ。

「く、くすぐりたいから止めてもらえませんかー?!」

この人本気触りだよ！今まで誰も居なかったから触られたこと無かったけれど変な感じ！

「イヤよ。こんなにサラサラした翼なんて、高級な羽ペンでもなかなかお目にかかれないわ」

わさわさわさわ。

くう……！このままじゃ遊ばれて終わってしまう！絡み付いてるこの人を何とかしないと！って、翼をしまえば良いじゃない！忘れてたよ私！

くすぐりたいのを我慢して集中。人の姿に……！

「ああ！」

何ですかその凄く残念そうな顔は……、可愛く膨れても出さないものは出しませんよ！

「と……とりあえず、話を続けてもいいだろうか？」

「ハイ。すみません」

「エイト、離れろ」

「イヤよ」

この人変り身が早過ぎるんじゃないかな……。隊長さんもっと怒ってやってください！

「エイトが先に言ってしまったが、我々としては大きな魔力の原因を味方に引き入れたかった。結果的に1人の女性、いや天使であったというべきか。解ってもらえるだろうが、宗教的・世界的な影響力は計り知れない」

うん、そうだよ。教会の人とかから見たら、天使様がやってきました！我らに導きを！奇跡の御業を！とか言われそう。

「我々魔法世界の影響力は、イングランド王国内のメルディアナ学校にある。十字教の影響力もあり、天使としての影響はそれこそ王を抜くものにもなりかねない」

ですよね。嫌な予感がしたんだ。ぜったい利用されるよね……？  
？というか、宗教ってこの時代は、かなりの影響力があった様な……。

「出来れば我々とメルディアナまで来てほしいのだが、問題は無いだろうか？無ければ向かい正式に協力内容を詰めたい」

無い……。よね？信仰集めは必須らしいし、魔法世界の組織とも仲良くなれそう。次の転生者が生まれてくる1300年頃に魔法世界

に行ける様にしてもらえば良いし、この隊長さんと仲良くなれば利用されないように上手く考えを助けてくれそう。あとは……。あ！女神様に作ってもらった家！

「はい、メルディアナつてところに行くのは大丈夫です。ただ、私の家が置き去りになってしまつのでそちらをどうにかしたいって思ふんですけれど」

「ならば結界魔法で封印を行うと良いだろう」

結界？そんな魔法は私の本に書いてなかったよ？封印とかもあるんだ。危険なものもありそうだし、色々教えてもらおうかな？

「えっと、結界とか封印とかの魔法は知らないのですが、どうすればいいのでしょうか？」

そういうと何だか変な顔をされてしまった。

あれ？そんな変なこと言つたかな？

「我々が最初に接触したときに『こおるせかい』の上級殲滅魔法からの封印術を、君が吹き飛ばした連中が唱えていた。結果的に魔法障壁だけで相殺されていたが、君ほどの魔力でなければ今頃まとめて氷の中だ」

ええええ？！あのおとき結構ヤバかつたんだ……。防御魔法の練習をしておいて本当に良かったよ……。氷付けにされたままどうなっていたか分からないものね！

「ともかく家を結界で覆つて、認識障害と影の魔法で隠せば問題ないだろう。君の魔力を楔として打てば封印完了だ」

認識阻害？影で隠すって言うのはなんとなく分かるけれど、また知らない魔法が出てきたよ。

「すみません、認識阻害って何ですか？」

「認識阻害の魔法は、例えばそこに有る物を無いと思わせたり、違う場所にあると思わせる魔法だ。隠したい物や人、暗示にも使われる」

なるほど。って暗示とか言われるとマッチョ神を思い出すな。でも必要そうだし習っておくだけなら損はなさそうかな。

「分かりました。家まで案内しますから、その魔法を教えてくださいませんか？」

「了解した。しかし初めて使う魔法を、一朝一夕で組み合わせる事は普通は無理だ、なので我々が魔法の陣を作る。最終的な魔法の発動と楔打ちの魔力供給だけは君に任せる」

「はい、お願いします」

うん、色々魔法が混ざってるみたいだし、イメージも出来ないからそこはまかせっきりかな。魔力を出して楔を打つ？ってだけならちゃんとイメージ出来そうかな。

「とりあえず、そろそろ腕を放してもらえませんか？」

「イヤ」

星を飛ばされました……。

「ええと、ここが私の家になります」

私達は場所を移動して、女神様に作ってもらった家の前に居る。  
なんか変な目で見られてるんだけど、どうしたのかな？

「随分と変わった家ね……、なんとというか前衛的？」

「見たことが無い壁ですね。何で出来ているのだろう」

散々な言われようだ……。

別に変な家だと思わないんだけどね。これくらい普通じゃない？リビングとベッドルームとバスルームのちよつと良いホテルみたいな感じ。一軒家なんだけど、西洋風だし何かおかしいのかな？

「ふむ……。きっと天使から見たらこれが普通なのだろう。封印術をかければ楔を抜くまで出入りは出来なくなる。何か必要なものがあれば今のうちに取り出しておくのを勧めするが？」

やっぱり変らしい……。うーん、取り出しておく物って言うても本は体に入れてあるし、服は天使様やるなら黒いほうは要らないよね？

「特には無いかな。無くても困るものはありません。家には生ものもありませんから」

なんかまた変な顔をされてしまった……。今度は何だろう？

「ねえ天使ちゃん。結構上等なドレスを着てるけれど、森を抜けるんだし外套とか無いのかしら？メルディアナへ行くまでに汚れるわ

よ？」

「あ、このドレスって汚れたりしないんです。家にあるのは色違いだけですから、天使として偉そうにするなら真っ白のこれだけで良  
いかな、なんて」

「よ、汚れない……?!」

「何でも有りなのね」

「偉そうに……か。まあそうだな。ククク……」

むう……。笑われてしまった。しかも呆れられている様な？これ  
じゃ、信仰を集めたり威厳とかには無縁になりそうな予感が……！

「問題無いなら魔法の準備だ、セブンは影で覆え！エイトは認識阻  
害の上乗せを！結界は私が担当する！」

「了解！」

そう言ってテキパキと作業を始めてしまった。

どんな手順かも分からないほど手早い様子で、もう終わったのか  
こちらに近づいてきた。

「それでは仕上げに『魔法発動体』になっているダガーを渡す。ダ  
ガーを抜けば魔法は解除されるが、君の魔力ならば他の者は抜けな  
いだろう。何も考えずに思いっきり魔力をこめて、玄関前に突き刺  
してほしい」

「はい！」

受け取ったダガーに魔力を流しながら、無心でダガーを振り下ろ  
した。

第9話 森からの旅立ち（後書き）

9話目終了。

## 第10話 証明は難しい

頬に当たる風が心地良い。

今私達は、イングランドを目指して空を飛んでいます。隊長さんたちは町の宿に預けていた荷物を背負って箒に乗っています！私はホワイト系のフード付き外套を買ってもらいました！飛ぶ時は翼に当たるからしまってもらったけれどね！

しかし、森を抜けて10kmくらい進んだら町があつたなんて……、森を出たら出たでやっぱり目立つ事になつていたのかな。町に行ってもこの時代のお金は無いんだよね！

「ふむ、認識障害の魔法は問題ないようだな」

「あ、はい。大丈夫だと思います」

そう、飛ぶとき明らかに目立つ私に、認識障害は覚えたほうが良いつて教えてもらいました。基礎だけど、魔力が大きいからひとまず問題は無いそうです。隊長さんと隊員さん達も認識障害を使っているから、一緒にいれば相乗効果でまづばれないみたい。

「そろそろイングランド上空だ。他の組織や貴族領の問題もある。

集中してメルディアナを目指す！」

「了解！」

「はい！」

貴族か……。普通に転生していたら憧れたのかもしれないけれど、今の身体だつたらむしろ絶好のターゲットだよな？天使的な意味も見た目的な意味も……。フード生活は必須になりそうだなあ。

とりあえず問題が起きる事も無く、無事にメルディアナって所に着きました。翼を出したままだと目立つという事で、近くの森に下りてフードと外套を装着。報告の時に天使の姿になってほしいと言われました。

「調査隊帰還しました！」

「コードデルタ！任務ご苦労。してそちらの者は？」

「こちらは謎の魔力を発していた本人です。観測データと本人の確認も取れています。これから内容は詰めますが協力体制をとる約束は取り付けました」

「了解した。会議室を使ってくれ。他には何かあるか？」

「事はメルディアナだけで済みません。現在の最高責任者を会議に呼んでください。後々はメガロメセンブリアとの協議になるでしょう」

「なんと！……責任者には貴官ら以外の護衛も付ける事になるが？」

「問題ありません。むしろ上の立場の目撃者は多いに越したことは無いでしょう」

何だか随分と話が大事になってる気がするんですけど？それにしても偉い人のやり取りって肩が凝りそうな話し方だね。なんだか別の世界の会話に聞こえるよ。

「それでは会議室までご足労願いたい」

「はい」

とりあえず無難に返事をして隊長さんの後を付いていく。

「わしがメルディアナの支部長になる。わざわざヨーロッパの内陸からようこそ」

出た……！いかにも魔法使い！って感じのお爺さんが目の前に居ます。

「調査隊も任務ご苦労。して、報告を聞きたい」

「了解しました。まず我々は黒の森と呼ばれる場所にて探索を行い原因不明の魔力と同じパターンを発する女性との接触に成功しました」

「女性？小柄だとは思っておったが女性だったか。それから？」

やっぱり話し方は仰々しいね。もうちょっと軽く話せないのかな？こんな話し方って、天使様を演じる時は覚えなないといけないのかな？

「はい。他組織と言いますが、冒険者による魔女狩りや名上げ行為を行う集団が、上級殲滅魔法と封印術を行おうとする現場に立ち合わせました。しかし彼女の魔法障壁はその一撃を防ぎきり、即座の反撃による勝利でした」

「ふむ、魔法使いとして十分な実力があるということか」

「本質的な彼女の評価はそこではありません。むしろそこからが本番です」

「む？何があつた？」

「シルヴィアさん、準備をたのむ」

「はい」

呼ばれたので外套を脱ぎ、横にくつつく様に立っていたエイトさんに預ける。

なんだか見た目だけで随分注目されてしまつて居るけれど、正直そこに感心してほしく無いな。自分でこの容姿になつたんじゃないからね。

とりあえず集中。翼を出すイメージをとる。天使の姿に……！

「これは！」

「なんと！」

魔法使いのお爺さんも、一緒に居る偉い人も驚いている。一度私の姿を見たことがある隊長さん達はあまり気にして無いようだ。

訂正。エイトさんだけは視線がおかしい。むしろじっくり見られる。今触るのは止めてくださいな？

「……天使。だそうです」

「天使?!」

「馬鹿な！」

やっぱり簡単には認められないよね。証明って言っても何か方法は無いかなあ？

「彼女の魔力パターンは観測されたものと完全に一致。また魔法世界 ムンドウス・マギクス の精霊系亜人にも似た魔力ですが明らかに別物。そもそも彼らは魔法世界から出たがりません。また、半透明の銀の翼など聞いたことがあります」

「なるほど……のう……」

「しかし、証拠も無いのに天使とは言えないのではないか？」

偉そうな人が反論してるけれど、その気持ちはわかるよ。私だって自分がこうなってるなければ『天使です』なんて言われても、頭大丈夫ですか？って聞きたくなるものね。

「ふむ……ならば天使らしい力は持っておるか？」

「……力ですか？」

「うむ、我々人間や魔法使い、魔法世界の亜人では出来ない事は無いかの？」

うーん……。光の精霊と闇の精霊を集められるとか？あとは私の本とか……。服が汚れないのは魔法で出来たりするのかな？

「彼女には使命があるそうですが……。その関係で何らかの力は無いだろうか？」

やっぱり光の精霊をたくさん集められるってのが良いところかな？思いつく事を言うだけ言ってみようかな。

「ええと、光の精霊をとでもたくさん集める事ができます。あとは着ている服が神力でまったく汚れません。あとはちよつと変わった本が取り出せます」

「服の事はここに来る間にまったく汚れず破れない事は確認したが、光の精霊と本というのは初耳だ」

「あ、はい。私は光の精霊をたくさん集められるので魔法も簡単に使えます。本というのは私の使命に関係するものです」

やっぱり無理がある気がするなあ。

「なるほどの。とりあえず光の精霊を集めてみてくれんか？」  
「はい」

それじゃ防御魔法のイメージで……。ただ集まるだけで良いから力を貸してほしい……！

「こ、これは……！」  
「なんと?!」

その瞬間、初めてこの世界に来たときの様に、白い尾を引いた光の玉が視界一面どころか世界を塗り潰すくらい集まっていた。

第10話 証明は難しい(後書き)

10話目終了。

第11話 メルディアナの日々(前書き)

本日はここまでになります。

## 第11話　メルディアナの日々

という訳で絶賛シスターさんのお手伝い中です！

あれから結局、『天使だと思われる』という認識をされました。

だって本物の天使なんて見たことが無いから分からない。なんて結論でしたよ……。

でも本当に天使なんじゃないかって認められたのは、光の精霊を集めた事じゃなくて生活の中での出来事でした。

「天使ちゃん　食事にしない？」

「あ、私ご飯食べる必要ないんですよ」

って、何気なく言ったら変な目で見られた。

「やせ我慢してたりするのかしら？それとも私達と同じ食事は口に合わないとか？」

「ち、違いますよ！本当に食べる必要が無いんです！」

怪訝な顔をされてしまったけれど、1週間くらい飲まず食わずでお手伝いしていたら、これは本物なんじゃないか？って、周りから見られるようになりました。上層部の人は監視を付けていたらしくて、その辺りからも情報が流れているようです。

一緒にご飯食べられないのが寂しいから、せめて食堂には来ない？って言われて付いていったら、本場の紅茶を発見！ここぞとばかりに飲んでいたら、食べられるんじゃない！って怒られてしまった……。

それからシスターメアリーとは何度かお茶会をするようになりました。メアリーはエイトさんです。あれから洗礼を受けて本当にシ

スターになっちゃいました。というのは表向きで、魔法世界からのお目付け役兼教育係だそうです。任務上いろいろな経験があるため、貴族的で優雅な振る舞いを覚えなさい！との事です。

「ほらそこはもつと作り笑いをして！手はもつと華やかに！」

「抽象的で分かりません！」

そんなやり取りをしながらも何とか礼儀とか作法とかを練習して、紅茶の飲み方も注意されつつ、シスターのお手伝いの日々を送っています。

そうそう、メルディアナの偉い人たちとの協力体制は、こんな感じになりました。

1、メルディアナ魔法学校と対等な関係であり、メガロメセンブリアへの協力は依頼という形で行う。

2、メルディアナはシルヴィア氏の身柄の保護と悪意のある噂の対処を行う。代わりに『天使』として仕事を行い、教会の布教の協力。また戦時においては祝福の儀式をとり行う。

3、魔法組織からの有事の際には、魔法使いとしての協力を教会より優先して行う。メルディアナはその存在を秘匿する義務がある。

4、イングランド王国と敵対しない。ただし、イングランド側からの一方的な攻撃が行われた場合はその限りではない。

5、これらの契約は、同氏の使命が遂行される1300年まで有効とされ、謝礼として魔法世界 ムンドウス・マギクス へ送り届け、以後の行動は詮索しない。

こんな感じになりました。

デルタ隊長さんからは、随分と譲歩された内容だと驚かれました。実質、協力体制をとっていけば拘束力は無いし、ボランティアが多いくらいなのかな？色々勉強する機会もあるみたいだし、何より魔法学校！知らない魔法や、薬草の勉強をしたいって言うたら、先にお嬢様になりなさいと怒られました……。だからってポエムとかも勉強する必要がありますか？厳しいよメアリーさん。

それから数カ月後。

私の偽お嬢様も板についてきたという事で、イングランド王国の国王様。ヘンリー1世と貴族達に、教会の天使として挨拶に出る事になりました。

女神様から貰ったドレスの質がいいという事で、そちらをメインに教会関係者という事で過美にならない程度に十字架のペンダントと装飾品。長い髪は結び上げて翼を見せるための演出を行うという事です。

「陛下、本日の謁見は教会の大司教殿と、例の天使殿になります」

「天使か。教会の狗はどんな見世物を手に入れたのやら、良い！通せ！」

「ハッ！」

ギイイイ！

重たい音を立てて、謁見の間の扉が開かれる。  
大司教さんを先頭に数名のシスターと私は国王陛下の前に姿を現した。

「……なんだ小娘ではないか」

「ほう、これは中々……」

隠す気も無い品定め視線と声が聞こえる。

「ううう……。見世物になるのは分かっていたけれど、結構ツライなあ。いけないいけない、顔を引き締めないと！」

「良い。大司教、顔を上げよ。発言を許す」

「ご尊顔を拝しましては、光栄にございます。本日は」

「帰りたくなってきたよ……。今は大司教さんが挨拶をしてるけれど、次は私の番になる……。本当に帰りたくなってきた。」

「そなたが噂の天使殿とやらか？」

来た……！

「良い。面を上げよ、発言を許す」

それを聞いて顔を上げる。それから膝を折って身を屈め、淑女の挨拶をとる。周りの貴族は礼を取った事に安心した様子を見せるがその隙に周囲に光の精霊を呼び込み、翼を広げて臣下では無い言葉を紡いだ。

「お初にお目にかかります国王陛下。わたくしは天使シルヴィア・アルケー・アニミス。神より使命を受け教会に舞い降りました」

ああ、貴族さんが明らかに怒ってる。でもすぐ隣の人は情けないくらいに腰を抜かしてるなあ。やつちやつたつて顔をしている貴族の人も居る。あ、衛兵さんが警戒して王様の横についた。それはそうだよ。

「ふっ！はははは！どんな教会の狗が来るかと思ったが！ここまで本物らしいものを連れてきたか！ふははは！」

「へ、陛下！笑い事では！」

「良い！ここまで出来るならばかえって説得力がある！旗印にもよかるう！」

なんかウケてる？笑わせるつもりはなかったんだけど、王様の考えって分からないなあ。

「シルヴィアと申したか御使い殿。それで我らに裁きでも与えに来たかな？」

「わたくしの使命は世界を育む事。そして悩める魂を救う事です。イングランド王国の方からの一方的な暴挙が無い限り、敵対するとはありえませんか」

「ほう……」

そろそろいっぱい입니다。元一般人に王様の相手はツライですよ！

「あいわかった！ヘンリー1世の名に誓って、御使い殿の救済の命を違えないと誓おう！ならば御使い殿は我が国のためにお力を裂くのであるう？」

「ええ、契約に従い1300年までの間、この地に留まり力を添える事を誓いますわ」

とりあえず付け焼き刃は終了。大司教さんが始終にこにこしていたし、後ろに付いてきたメアリーはにやにやしてるし。早く帰りたいです！

それからは色々ありました。

偽お嬢様教育が終わったので、メルディアナの資料で上級魔法や結界魔法。認識阻害とか隠匿に気配遮断。魔力の気配が大きすぎるから力を使うと居場所が分かるっていうので、魔力をもっと制御したり、隠れたりする勉強をしました。もちろんこの世界の薬草の勉強もしたけれど、魔法世界のほうが研究はもっと進んでいると言われました。

それからまた何年かすると戦争が起きて、騎士団長への光の精霊の祝福。結果的に勝利したけれど、私の力が戦争を勝利に導いた力の1つだって事が中々に重いです。

私自身も実は暗殺されそうになりました。簡単には死なないけれど、実際に襲われるのは怖いです。魔女狩りの時以来、久しぶりに攻撃魔法を使う事になりました。他の魔法組織からの攻撃だったので、結果的にメガロメセンブリアの魔法部隊が報復。その組織は壊滅したそうです。

1300年までの間160年以上イングランドに留まりました。デルタ隊長さんもメアリーも亡くなりました。二人とも最後まで色んな事を教えてくれて、組織の人と付き合いにはこういう所に気をつけるだとか、遠距離魔法は問題ないけれど懐に入られた時の対処とか。生物的な肉体が無いから鍛える事は出来ないの、いまいち身に付かなかつたけれど、二人の事を忘れずに練習していきたいと思いました。

そして最後の契約の年が終わり、魔法世界のメガロメセンブリアへ。魔法隊で良くしてくれる人を頼りながら、立场上貴族街の修道女寮に移住しました。

## 第11話 メルディアナの日々（後書き）

11話終了です。

第2章はここで終わりになります。

章タイトルを、「修行とお仕事見つけました」から変更しました。良く考えたら見つけるも何もすでに仕事は決まっていた事に気づきました（汗）

作中で紅茶が出てきますが、年代的にはまだイギリスには無いようです。

しかしイギリスといえばやっぱり紅茶のイメージがあるので、あえて引用しました。

イングランド王室で魔法を使って見せるのは、王室があくまで一般人だからです。

『ネギま！』的に王室の暗部や教会の裏関係者ならば知ってる人も居るであろうと思われませんが、一般人ならば光の魔法と天使の翼があれば信じるのではないでしょうか？

という訳で、またストックを溜めてから新章開始になります。

**第12話 望まれた命（前書き）**

3話＋設定2。連投になります。

## 第12話 望まれた命

「と、言うわけだからお前らには転生してもらおう！拒否しても良いが、その場合は魂を浄化して記憶は消去。輪廻の輪に戻ってもらう」

戻るも何も輪廻の輪から掻っ攫ってきたんだがな！神と言っても暇なくせに義務ばかりとやかく言いやがる！

「やっべえ！転生キター！チート特典とかあるんだろ!？」

この男は良いな！願望を表に出して、物事を単純にしか考えられなくなる暗示をこの空間にかけてあるが、ここまで思い通りだと気分が良い！

さて、どんな願望があるのか見てみるか。

・英雄「ナギ・スプリングフィールド」と「ジャック・ラカン」にガチ勝負でフルボッコ！

・ハーレムでうはうは！

・不老長寿で強靱な肉体！

「それじゃ！魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種でよろしく！」

くつくつく……！笑いがとまらねえ！こいつ典型的な猪突猛進タイプだな！良いぜ望みはかなえてやる！ただし『曲解』した結果にしてやるけれどな！せいぜい足掻くのを楽しませてもらうとしよう！

「よし決まったな！じゃあ泉に飛び込め！」

「おっし！行くぜ！」

バシャアアアアン

本当に何も考えずに飛び込んだな。まあ気づいてからののお楽しみってやつだ！

さて、次だ次！今度はどんな願望を見せてくれるのかねえ……！

「おっし！行くぜ！」

やつべえ！わくわくが止まらねえ！待ってるよ英雄ども！俺が格の違いってやつを見せ付けてやるからな！筋肉神にはあえて言わなかったが、麻帆良のハーレムはオレがもらう！ネギの野郎の仮契約ハーレムにはもったいないぜ！

バシャアアアアン

お！意外と冷たくない！これで意識があんて んってやつですか！

暖かい。

ここはどこだ？真っ暗で何も見えないし体も動かねえ。まだ生まれてないのか？

暖かいな……。しばらく様子見て所か……。

ゴンゴン！

なんだ？！まだ何も見えないぜ！

いや、身体はなんとなく動くな……。

この叩く様な音はなんだ？胎内でこんな音はしねえだろう？

「ギエエエエエエ！」

うお！何だこの声！生まれる前からやべえんじゃねえのかよ？！  
助ける筋肉神！

やばいやばいやばい！動け俺！

バリバリイ！

「キュルルルル！」

え?!何だ!何の声だ!身体は少し動くが何も見えねえ!  
って、何だ?何か旨そうな匂い……、って、赤ん坊がいきなり物  
食うかよ!

もぐもぐもぐ

勝手に食うな俺!ちくしょうなんだよこれ!

「キュルル!」

「ビイイイ!」

「ギエエエエエエ!」

なあ……まさか……人間じゃないのかよ?!  
俺、筋肉神になんて頼んだっけ?思い出せ!

『それじゃ!魔力はナギの倍!気はラカンの倍!不老の超命種でよ  
ろしく!』

そつだ!魔力や気は英雄に勝つために2倍!あとは不老の長命種  
!って種族を具体的に頼んでねえ!馬鹿じゃねえ俺!

長命種って言ったら何だ?!何かがある?!『ネギま!』の世界は  
魔法使いが隠れている地球と、ファンタジーな魔法世界だ!地球に  
あんな泣き声の生き物なんて居たっけか?オオワシとか?しかし鳥  
じゃ魔法とか気とか使えねえよな?そう考えると魔法世界 ムンド  
ウス・マギクス か……。やべえ詰んでねえ?

「キュルル!」

(くっそー！)

あ、この声って俺か！こんな泣き声しか出ないのかよ！ 考える  
！長命種で飯が貰えてこんな鳴き声の生き物……！

モンスター？、魔獣？、怪鳥？、竜種……？！

くっ！モンスターだったら本気で詰んでるな！魔法が使えるはず  
だから、せめて喋れるだろう！そう考えたら魔族的なやつか？！魔  
獣が妥当な気がしてきたな……、やべえモテねえじゃん……。

とにかく今はメシだ！成長しない事には何もできねえ！餌くれ餌  
ああ！

数カ月後。

もぐもぐもぐもぐ

肉最高！今日も母竜が餌を運んできてくれたぜ！おう！俺ドラゴ  
ンだった！やったぜドラゴン！これなら長命種の中でも最高峰だ！  
生きるのには問題ないし！餌も母竜が持ってきてくれるから順調に  
育ってる！早く成長して人間になる魔法も使いたい！

それにしても魔力や気ってどう使うんだ？気は気合だよな？ラカ  
ンが「気合だ。気合さえあればなんでも出来る！」って断言してや  
がったし。ちょっと気合入れてみるか？

「キョルー！」

(うおおおおおお！)

「ギエエ！」

「ビイイイ！」

うは！何言ってるか解らねえ！ただ何となく気合で出せたな。ドラゴンなんだから気さえ出せば生きていけるだろう。……あれ？俺なんか忘れてねえ？

さらに数カ月後。

やばい……。眼が見える様になってきてから気づいた。俺明らかに成長遅い。

何でだ？他の兄弟達はもう翼で飛んだり、母親について狩りに行ったりしてる。俺はまだ巣穴でたまに餌をもらえるかどうかだ。気を使えるから兄弟が狩ってきた餌を横から食べるが、このままだと狩りにもいけねえ……。

どうしてこうなった！考える俺！筋肉神は何をしてる！

『魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種！』だろう？！

……あ！まさか！俺成長しねえ？！

不老つてそういう事かよ！やべえ！マジで死亡フラグだ！ドラゴンっていったらでっかくなつてなんぼだろっ？！ちっこいままじゃ襲われたら終わる！

うん……？そういえばドラゴンつて成長割と早いのか？他の兄弟は結構ごっついよな？

緑の鱗に竜らしい角、たくましい腕と爪。尻尾も力強くて、翼は雄大に見える……。

母竜はどうだ？……意外とほっそりしてるな。しなやかつてやつか。翼は何か品があるな。女王様つてか！それにしても俺の身体つて成長遅え……。

それからさらに2カ月後。

……俺捨てられました。死亡フラグが完成！

母竜と兄弟達とはどこかに飛び立った後は行方は分からない。

育たない子はいらないらしい。自然の厳しさを生まれて1年足らずで勉強しちまった！

一応は、しばらく前の兄弟と同じくらいには育った……ただし、俺……雌竜でした……！

冗談だろっ！って何度も他の兄弟と見比べたりしたけれど、母竜との共通点の方が多くて……。これじゃ人間に変身してうはっはどころじゃねえよ！それ以前に死亡エンドかよ！

「キユ」

(何だよこれ！)

やべえ、怒鳴ったら腹減ってきた……。このままじゃマジで死ぬ。狩りもいまいち教わってねえし、幼体の竜が1人で生きていけるほど魔法世界は楽じゃないはず……。

ちくしょう筋肉！ラカンに会ったらまずはフルボッコだ！それまで生きてたらだ……。。

バサバサ！

知らない羽音が聞こえる。

え……。？何だ？俺を餌にしに来たのか？これで終わりか……。

絶望色に染まった顔を上げると、そこに天使が居た。

第12話 望まれた命（後書き）

12話終了。

## 第13話 出会い

魔法世界 ムンドウス・マギクス に移住してから数ヶ月。

魔法世界は『魔法』って名前の神様が居るみたいです。

『天使？へえ〜そうなんだ〜。』

……って、割と軽かったので逆にびっくりしました！こちらでは魔法がどれだけ使えるか。それから貴族や議員といった偉い立場に居るか。そういうのが重要みたいです。

力と権力って、ちよつと薄情じゃないかな……？

そんなわけでメガロメセンブリアの修道院で仲良くなった人達におしまれつつ、立場上お金だけはあったので、なるべく貴族の人たちに干渉されず、教会上層部の影響も少ない土地と家を買う事になりました。家より庭が広くて、下級貴族みたいな感じ。これでほとんどお金は無くなっちゃいました！

これからは転生者探しです。

私には使命があるからあまり家には居られないと言ったら、教会のシスターを中心に奉仕活動という名目で、見習いシスターの教育や庭で魔法の練習をしても言いという事を条件に管理してもらえらる事になりました。

何だかお世話になってばかりです。こっちは中世の地球と比べて食料や器具が発展しているので、お礼に未来の料理を披露したら、こんな食べ物見たこと無いと不思議がられながらも喜んでもらえました。

「それでは行ってまいります」

「貴女の使命に神の祝福があらんことを、私達は皆祈っていますわ」

そんな言葉で見送られて、飛行と認識阻害の魔法を纏って魔法世界を飛び回ってます。

探し続けるのに、疲れ難くてお腹も減らないって言うのは便利だよね。

そしてある山間部にさしかかった時　　！

「本が光ってる……！」

という事は、こんな山の中にあの子が居るって事かな？

マツチヨ神は本当に酷い事をするなあ……。今迎えに行くからね！本の光具合を頼りに山の上空を飛び回る。

「……あ！光が強くなった！こっちの方かな！」

どんどん強くなる光を頼りに、山肌にある洞穴に降り立つ。

え……？ドラゴン？！しかも何だか弱ってる！ええっと、本の表紙裏の情報は……。

・名前　無し　設定可能

・種族 ウィンドドラゴン 女性

・転生特典

魔力強大、気強大、老化し難い、成長晩熟、長命種。

・枷 『物事を曲解』された転生特典

なにこれ……！マツチヨ神は真面目に願いを叶えなかったって事だよ？！

……見た感じあまり成長していないから、凄く弱っているって事かな？

あの子は小学生くらいだったと思うから10歳くらい？まずは人間形態になれるように再構成するのは絶対！竜種って言うのはアドバンテージだから、変身能力の付加もあったほうが良いよね！

うん、そんな感じで。まずは話しかけてみてみよう！

やつべえ！何この天使！ものすごく可愛いんだけど！良いの送ってきてくれたぜ筋肉神！許してやるから早く助けやがれ！

「貴女は前世の記憶を持っていて、生まれ変わりをしていますよね？」

静かにそれでいて力強い声で問いかけられた。

う……なんか怒ってらっしやる？どういつことだよ筋肉神！とにかく話をしないとマズイ！

「キュルルルルル！」

（そ、そうだ！助けてくれ！）

うげ！人間の言葉出ねえじゃねえか！間違えられてどこかいかれたら困る！

「キュルルルル！」

（頼む！見捨てないでくれ！）

「もしかすると、言葉を話せませんか？……それでは私が質問をします。首を振って答えてください。大丈夫ですか？」

「キュル！」

（おう！）

とにかく首を縦に振る。

良かった、転生者だって事は確認してもらえたみたいだ！あとは人間にしてもらっただけだ！

「貴女はマツチヨな神の所で、泉に飛び込んだ方ですよね？」

こくこく。

（そうそう！）

「これから1度きりしか使えない神の力で貴女を助けます。まず完全な人間になれる様に。それから竜の姿と半竜人の姿にも。今は分からないと思うけれど、竜種はアドバンテージです。だから変身出来るようにします。問題は無いですか？」



いま……喋れたか？

「大丈夫？言葉は話せる？」

「あ……ああ……、声がだせる……」

ちゃんと……、人間になってる……。よっしゃああ！これでまずはラカンをつルボッコだ！それからハーレムだな！

「良かった！良かったよ！貴女みたいな小さい子をずっと一人にしてごめんね！」

そう言うのと天使にいきなり抱きかかえ上げられる。

うお！天使様いきなりスキンシップですか！むしろ大歓迎です！

「あ、ごめんね、とりあえずサイズは合わないと思うんだけど、この外套を被ってもらっていいかな？竜の姿で連れて帰ったら目立つし、女の子をそのままで居させる訳にいかないからね」

へ……？女の子？何を言ってるんだ？元の姿に戻してくれたんじゃないのかよ？

そう思うと自分の体を触ってみる！

な……？！嘘だろ……？

「……。お」

「お？」

「俺は男だあああ！」

「ええええええ？！泉の側で泣いていた女の子じゃないのかな？！」

……ぐ！この天使まさか天然か？！まさか勘違いでこの姿か？！

「ちがう！俺は男だ！泉に飛び込む時は、『魔力はナギの倍！気はラカンの倍！不老の超命種』って頼んだ！女にしてくれなんて言うてねえ！」

この勘違い天使め！もう1度セフィロト出せよ！ってまで！1度きりとかさつき言っていなかったか？！

「ああ、あの時真っ先に飛び込んだ男の人……。何も考えてなさそうだったんだよね〜」

「何？！あんた見てたのか？！」

見てたなら尚更間違えるなよ！

「う、うん。私も転生者なんだ。とは言っても希望とかは無視されて、マツチヨ神に無理やり天使にされたんだけれどね。あの女の子がずっと気になってこの時代に来るって聞いていたから、てっきり貴女だと思ってる……」

「無視された……。？しかも無理やり？って勘違いには変わらないのかよー！」

「じ、ごめんなさい！でも、これを見てくれないかな？」

そう言われて、セフィロトの杖が出てきた本の表紙裏を見せてくれる。

【『セフィロト・キー』の適応完了】

・名前を設定が出来ます。

- ・転生時の枷『物事の曲解』を解除しました。
- ・受肉により「リライト」の影響を受けません。

以下は上位神による初期設定により変更不可能です。

- ・種族 ウィンドドラゴン 女性

- ・転生特典

魔力強大、気強大、老化し難い、成長晩熟、長命種。

- ・風に加護

生まれつき持つ竜種的能力。風の精霊との親和性がかなり高い。

な、何だこれ！『曲解』って俺が願った能力そのままじゃないのかよ！

「ど、どういことだよこれ……」

声が震えてるのが分かる、マジで泣きそうだ……。

「最初から説明するね。まずあのマッチョ神は私達を、輪廻の輪から無理やり攫って来たの。だから転生させてやるとか言っていたのは、言い難いけれどマッチョ神の遊びなんだ」

遊びだとおお！ふざけるな筋肉！何だと思っでやがる！

「続けるよ？それであの泉の前に居た私達には、あまりものを考えられなくなる暗示の魔法がかけられていて、そもそも曲解したり単純な願いだけを言うようにされてたの」

マジか……。この天使、もとい転生者の先輩の言ってる事が本当なら、死亡フラグとかどうでもいいくらい霞むな……。

「それであんたは何なんだ？ どうしてそんな力が使えて事情を知ってる？」

「私は暗示が効き難かったみたいで、マツチヨ神に色々問い詰めようとしたの。そうしたら嬉しそうにお前を部下にしてやるって。そのまま『神核』って神様の魂みたいのを飲み込まされて、地球で身体を砕かれて、精霊にされたんだ」

ここまで来ると笑えねえな……。身体を砕かれるってどんなんだよ。

「そのまま1800年程、精霊に溶け込んだまま意識はほぼ無くって、別の女神様が助けてくれたんだけれど、そのときにマツチヨ神は罪を犯したから消滅させられたって聞いたの。私には『神核』があるから、天使になってこの世界の管理を引き継いでくれるって。そして転生者に埋め込まれた不幸な枷を取り外してあげてほしいって、この本を託されたの」

は、ははは……。ありえねえ……。俺のほうがよくぼどましじゃねえか。食べ物さえあればドラゴンの力で何とか生きていけたかもしれない。それがこいつは意識を飛ばされて、使役されて、何百年も俺を待つてたって？

「とりあえずここに居てもしょうがないと思うんだ。メガロメセンブリアに家があるから、一緒に来ない？」

「あ、ああ……。」

屈託の無い笑顔で微笑む彼女に、俺はそう言うしかなかった……。



第13話 出会い（後書き）

13話終了。

## 第14話 新しい名前(前書き)

ここまでで連投終了です。  
この後、設定2を投稿。

## 第14話 新しい名前

「ではその子が、おっしやっていた救済すべき魂の1人ですの？」

「うわー……、いかにもお局様なシスターだな。こんなのを相手にしてるなんてシルヴィアのやつも大変だぜ。」

「ええ、彼女の魂の枷はすでに解き放ちました。今は無垢な仔羊。これから生きる術を学び、羽ばたいて行く命です」

「すげえな……。堅苦しい言葉がすらすら出てきてやがる。ここに来るまで普通の女の子みたいに喋ってたが、伊達に何百年も天使様やってねえって事かよ。」

「それから彼女には名前がありません。出来ればきちんとした名前と後見人を付けてあげたいのです」

「あら、それでしたら【銀の御使い】様が後見人になるのがよろしいのではなくて？教会に身を置くのでしたらこれ以上の後見人はありませんわ」

「私は使命ある身です、いつまでもメガロメセンブリアにいられないのです」

【銀の御使い】だと？二つ名持ちかよ！それにしても使命ってのは世界中で転生者を探し回ってるのか？

「では洗礼は受けさせますの？」

「それは本人の意思で決めてもらいたいと思っています」

洗礼？！俺は宗教信じて無いぞ！いや神様が実在してるのはもう十分解っちゃいるんだがな……？とりあえず名前どうするか。不本意だが男には戻れないみたいだし、神の力つてのもあの筋肉が上級神だったせいでどうにも出来なかったみたいだし……。だからって女の子らしい名前はごめんだ！

「では『フローラ』はいかがかしら？これから花咲く可憐な少女にふさわしいと思うわ」

何いいいい！ちょっと待て！そんないかにも女の子な名前はごめんだぞ！

「えっと『フローラ』……？って呼んでいいのかな？」

「イヤだ！お「……むぐむぐ……！」」

『俺は男だ！』って言おうとしたら、シルヴィアが口をふさいできた。

(彼女を怒らせると、見習いの子達はすっごく怒られるの！だから言葉使いは気をつけて！) “ふり”で良いから、丁寧な言葉でね！)

そう耳元でささやいてくる。

なるほど……やっぱりお局様なわけか！しかしフローラはねーよ！だからと言って決めないとフローラにされちまいそうだし……！

「その子に異論が無ければ『フローラ』と呼びますわ。よろしくて？」

やべええええ！何か考えないと！せめて中性的な名前で！

「ふ、ふるー！」

「フロウ？そっちが良いのかな？」

「ナイスだシルヴィア！『フローラ』に比べたら100万倍ましだ！

「あら、では『フロウ』ね。これからよろしくお願いいたしますわ」

「は、ハイ。ヨロシクオネガイシマス」

「あ、あぶね……。もうちょっとかっこいい名前が良かったが、仕方が無い……。」

「それでは【銀の御使い】様、この子を着替えさせてきます。後でお部屋にお連れいたしますわ。着させていた外套は洗濯させておきますわ」

「はい、よろしくおねがいます」

「ああそうか、マント借りたままだったな。うん？なんでシルヴィアはそんな顔でこっち見てるんだ？何か哀れむような……？」

「それではフロウ。こちらにおいでなさい」

「あ、はい」

「また後でね」

「シスターではないので修道服は着せませんが、【銀の御使い】様が連れてきた娘です。それなりの格好をしなければなりません。で

すのでこれを着なさい」

「はあ……?!」

そういつて渡されたのは、上品にレースがあしらわれた白いワンピース。修道院という場所柄か肩の露出を控えた長袖のものだが、女物という時点でありえない。

「ちょ！あのとときの哀れみの目はそういう事か！まて！もしかして下着も！」

「着方は分かるかしら？」

「え、その、あの……！」

まてまてまて！

パニックを起こしている間にお局シスターにテキパキと着せられていた。

いつの間にか髪を梳かされている。

「は……！俺は何を?!」

「俺？」

じろりとお局シスターの目線が光る。

「あ、しまった。シルヴィアが言葉使いには気をつけるって言うていたじゃないか！でもいきなり女言葉は無理だつて！」

「フロウ。貴女はまだ小さい。【銀の御使い】様が魂の枷をお解きに成られたと言うならば今まで苦労してきたのでしょう。これからは皆で淑女の何たるかを大切に教えていきます。よろしいですね？」

「ハイ……」

お局シスターの眼光の鋭さに、そう答えるしかなかった……。

「シルヴィア……きたぜ……」  
「いらっしやい。……やっぱり可愛くされちゃったね」

ああやっぱり解ってたのか……。そうならそうと言ってくれればよかつたんだ。

「私のほうで動きやすい服とか、中性的なものを用意しておくよ、でもシスターに見つかつたら怒られると思うから、結局はある程度は慣れないとダメかな？」

そうか、怒られるのか……。じゃあなるべくシルヴィアと居よう。俺の事をちゃんと知ってるのはシルヴィアだけだしな。あとは他の転生者か。俺達のことを考えたらやっぱり酷い事になってるのか？

「なあシルヴィア。他の転生者ってどうなってるんだ？」

「分からないの。生まれる年代が近くならなと情報が出てこないんだよ」

情報？この間使っていた本か。見せてもらえるなら何か調べられるんじゃない？

「シルヴィア。この間の本を見せてくれないか？」

「え?!……良いけど……私にしか使えないし、それに……笑わないでね?」

笑う？何で渋ってるんだ？

「はい……」

どこからとも無くいきなり本が出てきた。とりあえず受け取ってみてページをめくる。

……。『シルヴィアちゃんの取扱説明書』って！

「はあ?!」

「だから笑わないでって言ったのに……」

これも神の悪戯ってやつか……！  
ぺらぺらと内容をめくってみると……。

「チートじゃねえか!」

「やっぱりそう思う?」

俺の『魔力はナギの2倍、気はラカンの2倍』も大概だと思っただが、こいつのはおかしいな。筋肉神が魂の器に限界があるとか言っていたが、神の魂は伊達じゃないって事か。

「とりあえず役に立ちそうなのは魔法の教本部分くらいっぽいな。

あとは転生者に直接会わないとダメだろう」

「うん。でも魔法はそれに書いてある事以上の知識はもうあるから、別にまとめてあげるよ」

「お！それは助かるぜ!」

気は何となく解るが魔法はさっぱりだからな、先生も居る事だしじっくりと魔法を覚えるか!



## 第14話 新しい名前（後書き）

14話終了。

風竜という事で、フロウ flow にしました。  
「名は体を表す」を意識しています。

## 第14・5話 設定2（ネタバレ注意）

主人公2の初期設定

名前：フロウ

誕生：1300年頃生まれ（生前は22歳）

性別：女性（生前は男性）

身長：現在の人間体は125cm、竜体は2m程。（生前は178cm）

体重：人間形態28kg、竜形態は測定不能。（生前は74kg）

種族：ウィンドドラゴン

枷：『物事を曲解』

### 【外見】

シルヴィアの勘違いと、『曲解』によってアジア系寄り少女の外見に。

深緑色のショートヘアに緑の目。皮膚の色もアジア系。

竜形態では深緑色の鱗を持つ翼竜。竜と人を会わせ持つ形態にもなるが子供の姿に引っぱられる。

## 【特徴】

自己中心的で猪突猛進な気質。元男性だが、シルヴィアの境遇やメガロメセンブリアのシスター達に淑女教育を受けさせられ、良い意味でどんだん面白い方向に曲がって行く予定。

原作の一部の大きな出来事や重要人物の知識がある。そのため『正義の魔法使い』気質には染まっていく事が無い。

『セフィロト・キー』で再構成されたため、魔法世界人でありながら『造物主』のリライトには縁がなくなった。地球でも生きていく。本人は魔法世界の秘密を覚えてない。

## 【能力】

### ・風の加護

生まれつき持つ竜種能力。風の精霊との親和性がかなり高い。

### ・転生特典

魔力はナギの2倍、気はラカンの2倍で、成長し難い超命種。

ただし能力の制御が出来ていない。そのため初期のシルヴィアやくしゃみネギ状態。

メガロメセンブリアで教育を受けて改善していく予定。

第14・5話 設定2（ネタバレ注意）（後書き）

設定2終了です。

## 第15話 確認と今後の行動(前書き)

2話連投です。

追記1/7(土) 0:33

アクセス解析を見たらいつの間にか

ユニークアクセスが1300人越え!

PV12400アクセス超え!驚きです!

趣味と勢いだけで始めましたが嬉しいものですね。

まだまだ初心者ですがよろしくお願いします!

## 第15話 確認と今後の行動

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ！」

……何も起こらない。

……分かってたよ！いきなり魔法を使えないことくらい！

シルヴィアから借りた初心者用の杖を持って魔法の練習を始めてみたのは良いが、やっぱり簡単にはいかないか……。シルヴィアが言うには、魔力だけあっても制御や理論をしつかりしていないと暴走したり、思ったとおりの結果が出ないらしい。

そういえば原作のネギ坊主はしょっちゅう魔法を暴走させていたな。

今の俺はあれと同じレベルか。いや理論はさっぱりだからアレ以下かよ……。

「まずはイメージかな。どこに、どんな形で、どんな効果が、どれだけ起きるのか。そのイメージが出来ていないと、精霊だって何をして良いのか分からないよ」

なるほど……経験者のいう事は違うな。しかしイメージか。見せてもらったほうが早い気がするな。

「シルヴィア、ちょっと見本を見せてくれよ」

「うん、いいよ」

そういうと肘を上げて、指先を空に向けて一言。

「光の灯火」

そう呟くとシルヴィアの指先に光が集まる。

なんていうか密度？小さな光だが凄く濃厚な気配がする。これが魔力か？

「何か呪文ちがくねえ？」

「火より光のほうが相性良くてね。光れば同じじゃないかな？」

まあそうなんだろうが、何か納得がいかない……。

「私の場合は、初級は独学だったから10年くらいかかったんだけど、ここは教えてくれる人が多いから、結構すぐ色々つかめると思うよ。あと、始動キーも考えておかないとね」

10年か。まったく教えてくれる人が居なかったとしても、シルヴィアには教本があった。それで10年って事は俺の場合何年かかるんだ？

「ちなみに私の場合は、精霊との親和性が高すぎる上に魔力も高いせいで、制御が全然出来なかったのが理由だよ。フロウくんの場合は相性が良い風を中心にイメージと制御の練習かな」

なるほど……！じゃあとりあえずイメージからか！魔法をたくさん見せてもらおう！

そういえば、シルヴィアは原作の事は全然知らないのか？

「シルヴィア、話が変わるが原作ってどこまで覚えてる？」

「全然覚えて無いよ」

「はあ……？！」

「ちょっと待て。全然覚えてなくて200年以上やってきたのかよ！よくそれでメガロメセンブリアに家買ったな！」

「俺が覚えてる原作教えておいてやるよ。準備しておいたほうが良いぜ。と言ってもまだかなり先になるから、忘れない様にメモしておいたほうが良いな」

「ホント？！それは助かるな。女神様から2003年の夏に魔法世界 ムンドウス・マギクス で山場だった事だけは聞いてるんだよね」

大丈夫かよそれ……。

とりあえず、大きな事件のまとめだな。

覚えてる知識をまとめるとだ。

・原作の約600年前

エヴァンジェリンが真祖の吸血鬼に転化。

・原作の約20年前、戦争が起きる。

ナギ・スプリングフィールドとかジャック・ラカンとかが活躍する。

・2003年の3学期に麻帆良学園で原作開始。

ナギの息子の、ネギ・スプリングフィールドが何故か女子中の先生になる。

・エヴァに襲われたり、修学旅行や学園祭でトラブル多発。  
仮契約者が増えていく。

・2003年の夏に魔法世界 ムンドウス・マギクス に行く。

あれ？意外と覚えてねえ……。とにかく今は1300年代。約100年後のエヴァンジェリンに接触するかどうか1つ目の問題か。

「エヴァンジェリンはどうする？関わりに行くのか？」

「うーん、転生者がいれば関わるよ。絶対に。ただ居なかったら放置かな。悪いとは思っただけけど、原作の大きな出来事は必ず起きるって言われてるから、誕生は必ず起きるんじゃないかな」

なるほどな。確実に起きる出来事だから邪魔は不可能。後々良い立場にする事は協力できるかもしれないが、修正力とか働きそうだ。

「本の確認は定期的に行っているから、1400年前後に生まれれば探す事はできるよ。ただしそばに近寄らないといけないから、世界中探すとすると結構大変かな。フロウくんの事だって時代が分かっていたから、運が良かったと思うよ？」

確かに運がよかったかもしれない。山肌の小さな洞穴に居たわけだから、空を飛べるシルヴィアには見つけやすかったと言うべきだな。エヴァンジェリンは何処かの城に居たはずだが、転生者が近くに生まれるとは限らない。それならば……。

「やっぱり修行だな。分からないものに警戒しておく必要はあるが、準備を整える事に専念だ！」

「うん、分かった。魔法は教えるけど、気は出来ないから独学になっちゃうと思うよ」

「気は何となく使えるから問題ねえな。それじゃ早速修行だ！」

まってるよ筋肉ラカン！フルボッコだからな！

数カ月後。

「なあシルヴィア！グラニクス行かねえ？」

「自由交易都市？どうしたの急に？」

「拳闘士やってみたい！」

「え……？結構危ない所だったと思うんだけど？」

やっぱり怪訝そうな顔してるな……、まだ俺だって力不足は分かっちゃういるんだが、実際この世界の实力者って言うのを知っておかない事には活動は出来ないだろう。

シルヴィアなら後衛の魔法使いにはピッタリだ！魔法はまだうまく使えないけれど気は気合で何とか使える。实力も分かって修行も出来るから一石二鳥だと思うんだよな。

「うーん、シスター達が認めないと思うけど、様子を見に行つて、どんな実力者が居るか確認するくらいなら大丈夫じゃないかな？」

「よしー！じゃあ行こつぜー！」

約束は取り付けた！こっそり参加申し込みして実力アップだ！

**第15話 確認と今後の行動（後書き）**

15話目終了。

## 第16話 グラニクスの拳闘士

どうしてこうなったのかな？

「さあ本日の飛び入り参加！見た目は小さな少女ながら竜人のフロウ選手！相方は謎の白マントの精霊巫人ホワイティ選手！名前がそのまんまだー！」

見学するって言ってたよね？拳闘士の実力が分からないから見てみたいって言うていたけれど、何も目の前じゃなくて良いんじゃないかな？と言うか何で私は偽名？！

「いいじゃん。二つ名持ちなんだから？相手に警戒されて実力見れないよりマシじゃねえ？」

「あれは教会関係の一部の人が言ってるだけだよ？魔法世界 ムンドウス・マギクス じゃ、全然有名じゃないよ！」

「よし！じゃあ、今日から有名人！」

「ちよつとお！」

まったく急すぎるよ！見学じゃ満足出来なくなっちゃったかな？帰ってからシスター長に怒ってもらおう！私みたいに偽お嬢様教育で苦労すれば、巻き込まれる大変さが身に染みるよね？

うん、次の魔法修行はハードモードは確定かな。

「対するは獣人のラグ選手！相方は魔法使いのオード選手！どちらもオードックスの前衛後衛マツチになりました！これはどうなるー！ー！」

よし！一瞬シルヴィアの顔が黒くなってるように見えたが問題ないだろう！ぶつぶつ言ってるがちゃんと戦ってくれそうだ！

問題はあっちの獣人だな。体格差は気で補えるか？子供の体といつても俺の身体は竜種だから、気を纏えばそれなりにパワーはあるはずだ……！とにかく思いっきり殴ってみるか！

「それでは試合開始！」

オオオオオオオ！

うっわ！会場の熱気やっべえ！とにかく殴りこむ！気を集中！気合だ気合！

叫ぶような要領で全身に気を纏う。

漏れてる量も結構あるが纏えるだけ上等だろ！

「てりやああああ！」

右手に気を集中して突撃！風竜のせいかな、風を纏っている様な気もするな！

バシーン！

「ほお〜。見かけによらず中々良い重さのパンチじゃねえか！」

フロウの右手に纏った気も風もラグは片手でいなす。  
あっさりかよ！結構気合入れたんだが！って、拳を捕まれちまった！

「氷の精霊27柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手！氷の27矢！」

やべえ！魔法使いが撃つてきやがった！  
後ろの魔法使いが相手の獣人を避ける様に、左右と上から撃つて来る。

「げ！避け場がねえ！」

「はっはっは！お嬢ちゃんはこれで終わりだ！」

マジか！こんなにあっさり！

「魔法の射手！連弾・光の101矢！」

「なんだと?!」

後ろからシルヴィアの声が聞こえた。  
相手の魔法使いの氷の矢を全部相殺。そのまま獣人だけを吹き飛ばす。

「く………！シルヴィア助かった！」

「ホワイティですよ？」

あ、やべえ、目が笑ってない。

「まったく。練習相手にしたかったみたいだけれど、相手にもなっていないよ？」

悔しいがまったくその通りだ。修行は結構したつもりなんだがこの様か。

もっと気の使い方を、ちゃんと習うべきだな……。

「どうやら魔法使いの方を先に叩くべきだな！オード！」  
「任せろ！」

げ、向かってきやがった！  
気合で防御できるか？

「光の楯」  
「何?!」

すげえ……。相手の攻撃がまったく通ってない。  
これが魔法使いの戦いつてやつか。正直なめてた……。  
魔力と気さえあればテキトウに魔法使ってボコボコに出来ると思  
っていたんだが……！

「 来れ氷精 大気に満ちよ 白夜の国の 凍土と氷河を こお  
る大地！」

「よつと！これでおしまいだぜ！」

マズイ！気を纏った攻撃をされた後にさらに魔法だ！これじゃい  
くらなんでも！

パシン！

氷結魔法が闘技場を凍らせながらシルヴィアに向かって行くが魔  
法障壁に阻まれる。

マジか……。防御魔法解けてねえじゃん……。ドンだけ頑丈なんだよ。

「闇夜切り裂く 一条の光 我が手に宿りて 敵を喰らえ 拡散・白き雷！」

シルヴィアが唱えた雷魔法が相手に降り注ぎ、痺れと煙幕を張る！

「今！」

「お、おう！」

完璧に引き立ててもらった形か！だがせめて一発！

「おおりやああ！」

今度こそ殴りつける！

必死に気合をこめた右手を、獣人めがけて振り切る！

バキィ！

「ぐあ！」

そう言っつて獣人は倒れこみ気絶したようだった。

「ノックアウトー！ラグ選手！オード選手ともに立ち上がりません！勝負あり！」

オオオオオオオオ！

「か……。勝てた……。！」

「うん、勝てたね」

闘技場を退場しながら、そう呟く。

ハッ！ヤバイ本気で目が笑ってない！

「ちょっと、露店に……」

「じゃあ、私も付いていこうかな？」

ぐ……。そうだな……。素直に謝って、修行を付けてもらおうか……。

「……ごめん。調子に乗ってた……。格が違うのが身にしてみた」

「うん、それともう一つだね」

何？！2つ目だと？！何だ！何に怒ってる？

……考える俺！このままじゃまた死亡フラグか！

「嘘ついたでしょ？」

「え?!」

嘘？　　って、あ！勝手に登録した事か！

「そっか……。勝手にごめん。でも俺どうしても大会に出てみたい  
て……」

「出てみたいのは分かったよ。男の子の顔してたからね。でも嘘  
ついて出場はダメ。きつと出たいって頼んでくるんじゃないかって  
思ってたよ」

ははは……。完全に見抜かれてるじゃねえか……。

「フロウくんは前衛向きな性格は分かるけれど、それだけじゃダメ

なのはよく分かったでしょ？一人でできる範囲は限られてくる。だからもつと相手を頼って、その上で自分でも対処する手立てを持っておくのが一番かな？」

「あ、ああ……」

「今度シスター達の練習以外に、魔法部隊の知り合いに来てもらうか？近距離も遠距離もエキスパートの人が居るからね」

魔法部隊！メガ口の騎士団とかってあまり良い印象無かったけれどそれでも今の俺より遥かに強いはず！

「あと、精神は大人かもしれないけれど、自分の体は2歳にもなっていないって忘れてないかな？成長も遅いつてもあるんだし？」

……あ！……完璧に忘れてた。

## 第16話 グラニクスの拳闘士（後書き）

16話目終了です。

次は数話まとめて連投予定です。  
先のストックを確保中。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1560ba/>

---

青と赤の神造世界

2012年1月7日00時48分発行